

514  
217

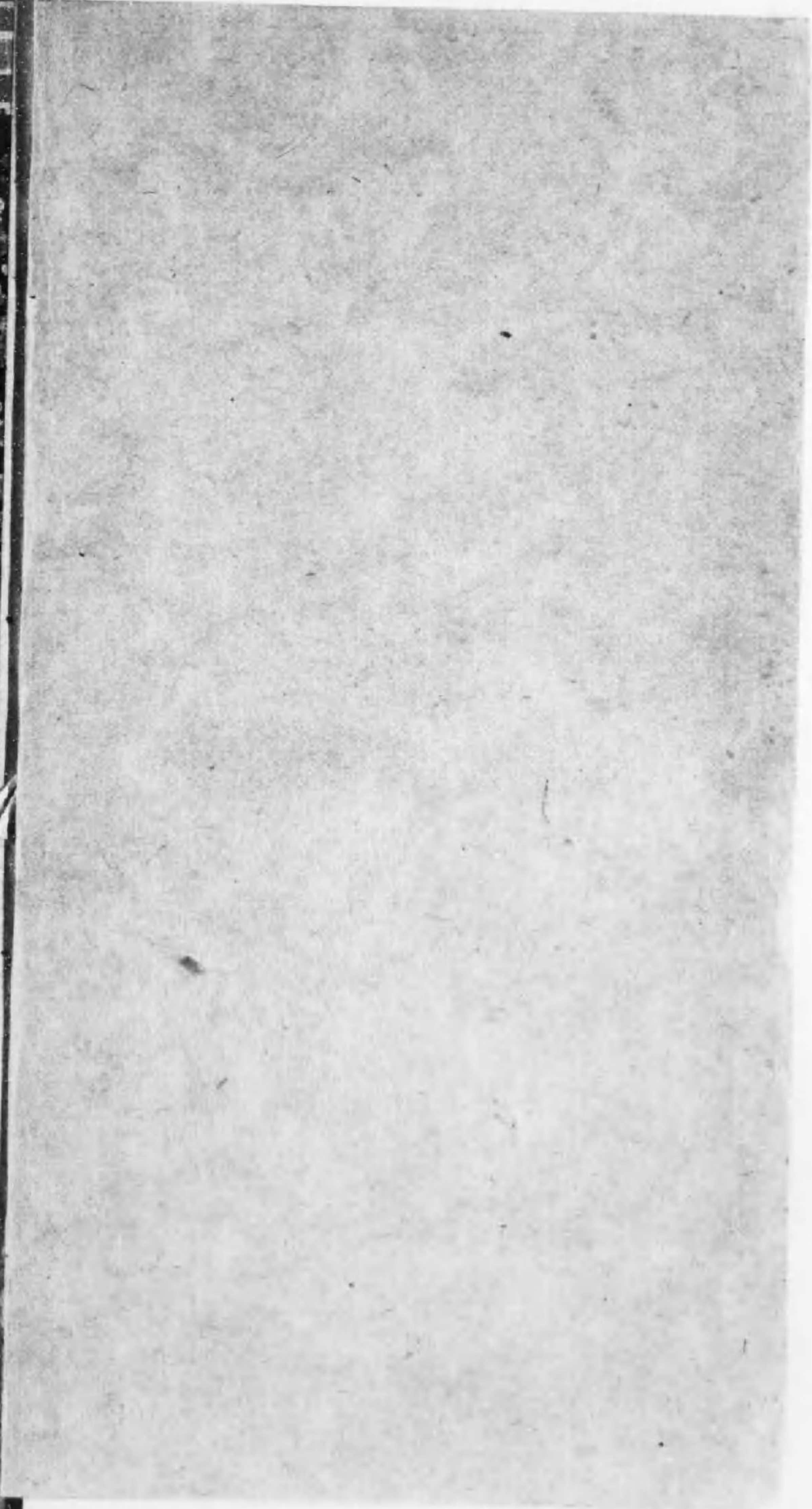
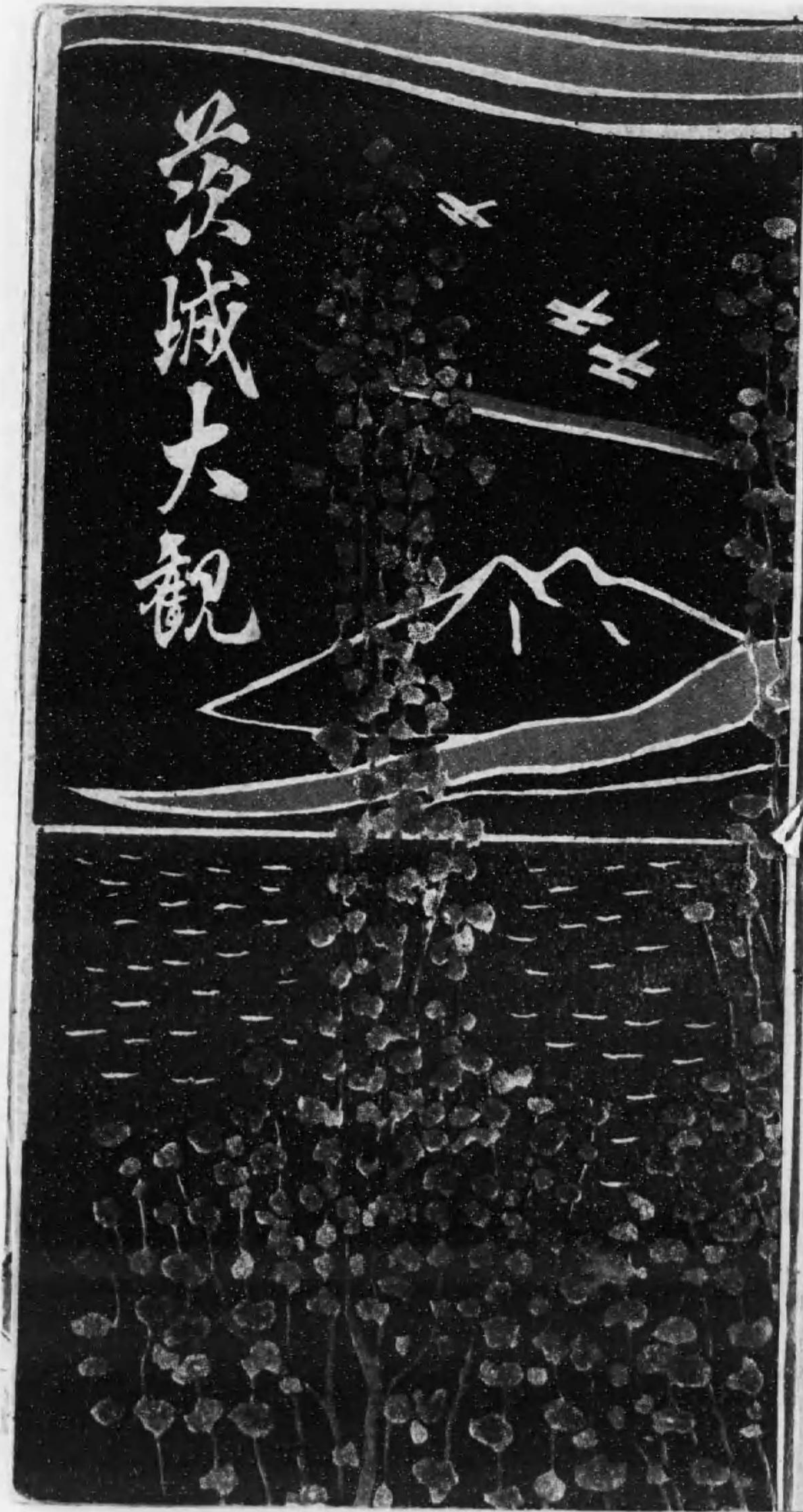
X  
複写

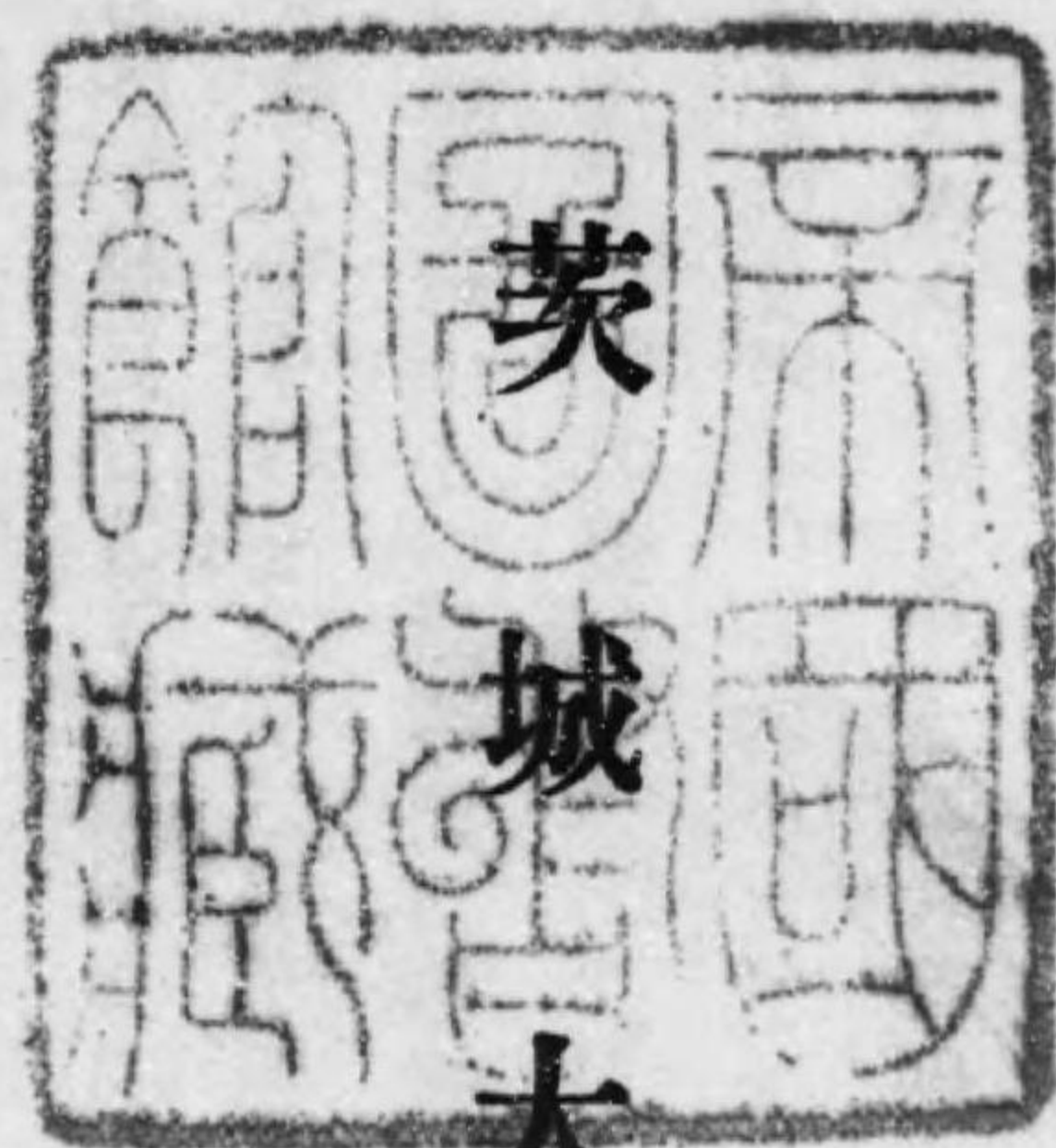


始



茨城大觀





觀

大正  
13. 4. 5  
内交

174-217

緒言

本書編纂の動機は、水戸市に於て開會すべき本縣主催關東聯合教育會に出席する、會員の方々に對し、本縣の名所舊蹟等を紹介する意味にて茨城縣案内といふやうなものを作り、一部つゝ之を贈呈したならうだらうとの考から始まつたものであるが、其後段々考へて見ると、縣全體に亘る名所舊蹟の概念の如きは、番に他府縣からの御客様に之を紹介する必要があるばかりでなく、却て案内役の本縣人がそれを知らないで居ても困るし、尙ほ從來此の方面の著書に乏しく、従つて縣民として、國民として、當然知らなくてはならぬもの知らず居たといふやうな傾があり、確かに縣教育上の一缺陷であることを感じたので、竿頭一步を進め、他府縣より出席の會員諸君に贈呈すべき一時的の案内書たる



大



に留めず、能ふ限り各郡に亘り適確嚴選、微に入り、細を穿つといふ方針で編纂に取り係り、縣の郷土誌たるに足るべき教科書的のものを作り上げやうと努力したが、完全には又々距離のあることと信せらるるが、從來無かつたものを兎も角も拵へたといふ苦心丈けは結晶した譯である。

本書は、昨年の春以來編纂に着手したのであるが、九月一日の大震火災に依つて、昨秋水戸に開催せらるべき筈の關東聯合教育會も無期延期となり、従つて編纂の方も一時見合せの姿になつて居たのが、教育復舊も案外に早く見當が着き、愈本年三月下旬右聯合教育會は花々しく開會せらるることとなり、其處で本書編纂も、大馬力を以て進行し初めたが、市郡全部を網羅しての郷土誌を短日月間に編輯するは、實は思つたよりも難事であり、翻覆精檢する暇もなく、

二

これを上梓したやうな次第であるから、脱漏、誤謬も定めて多いこと、思ふ、故に反省檢討は勿論、大方の示教に依つて、或は第二版から、これを改訂する考である。

本書編纂に就て、各郡市長及び有志教育家が適確なる資料を、多々提供し呉れたことは、本會の特に感謝して措かざる所である。

本書編纂は極めて、多忙裡に短日月の間に完了したから、文體或は統一を缺き項目或は錯綜したれど、事實の正否には比較的注意を拂つた。

本書の統計に關するものは、本縣の『縣勢要覽』又は『本縣學事一覽』等を利用し、其最近の調査に準據したものである、其他は郡市よりの提供と、編纂員の出張調査及郵便…照會等、並に茨城古蹟名勝誌、常陸國誌、水戸名勝古蹟、

三

水戸市要覽なども参照した。

大正十三年三月

茨城縣教育會

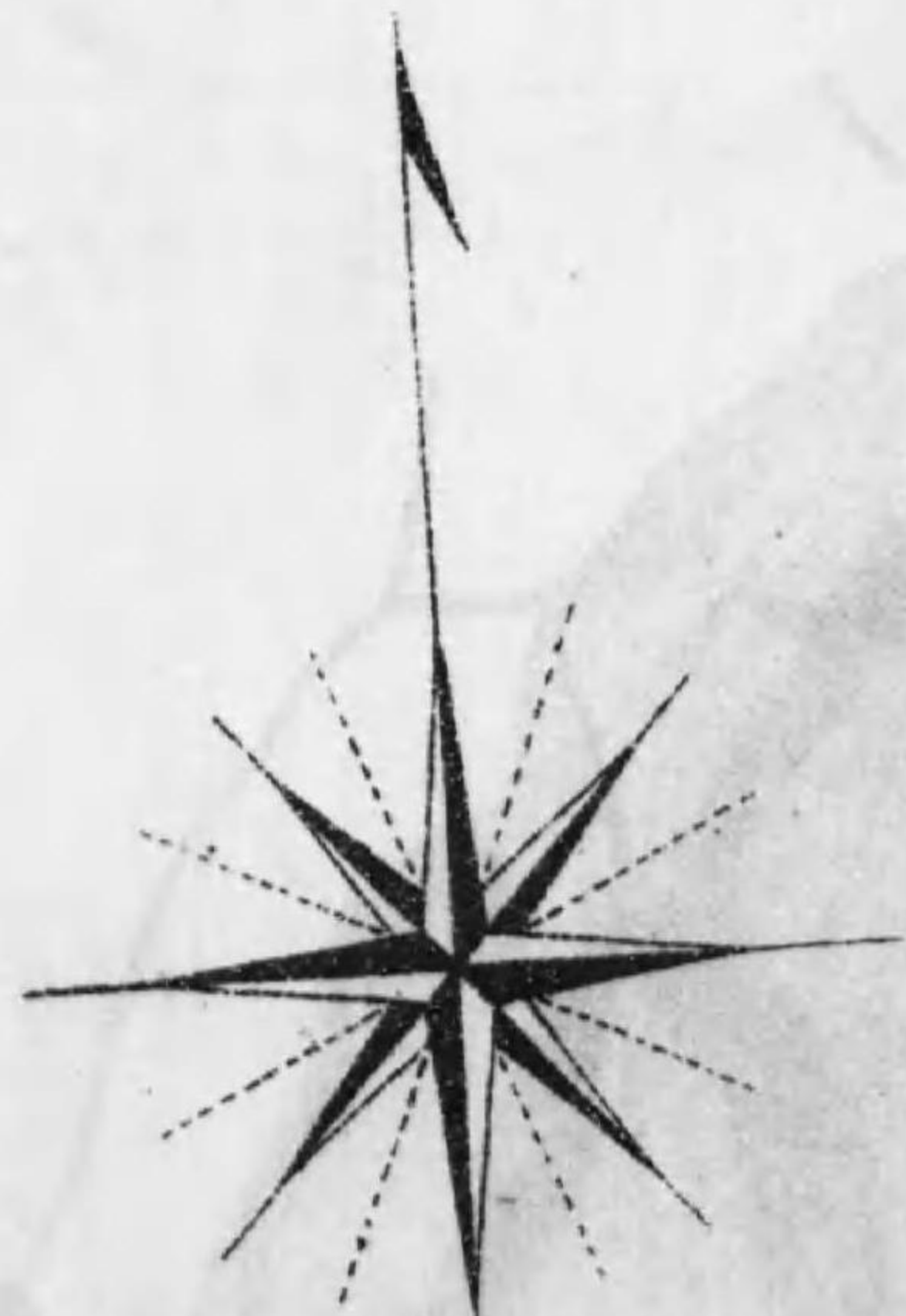
廣 弘 孔 子  
子 館 記  
神 廟 記  
社 院  
⑩  
吉 田  
王 神  
社 院

露光量違いの為重複撮影

# 茨城縣管内圖

縮尺四萬分之一

本邦里



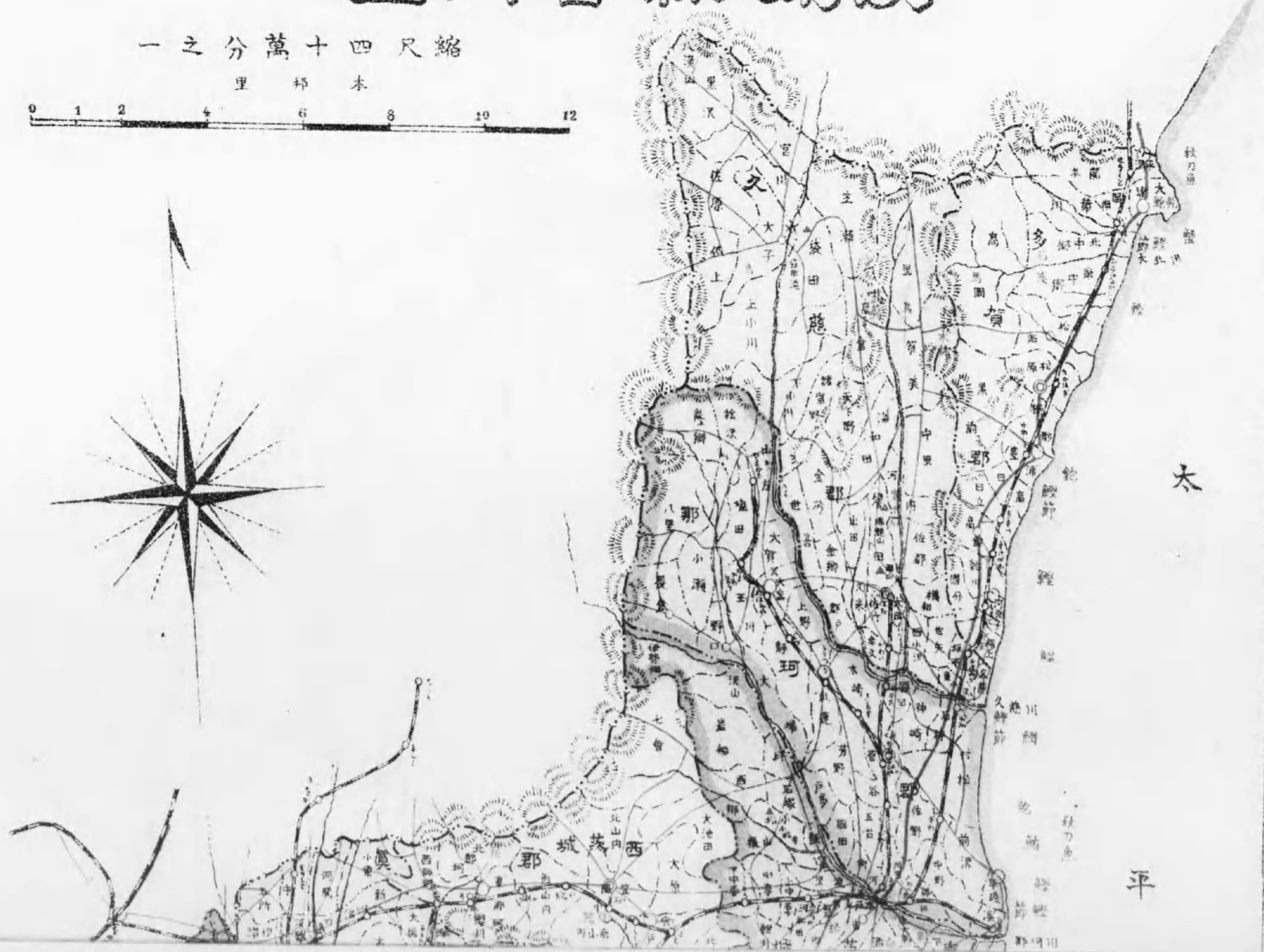
太平

露光量違いの為重複撮影

# 茨城縣管内圖

縮尺四萬分之一

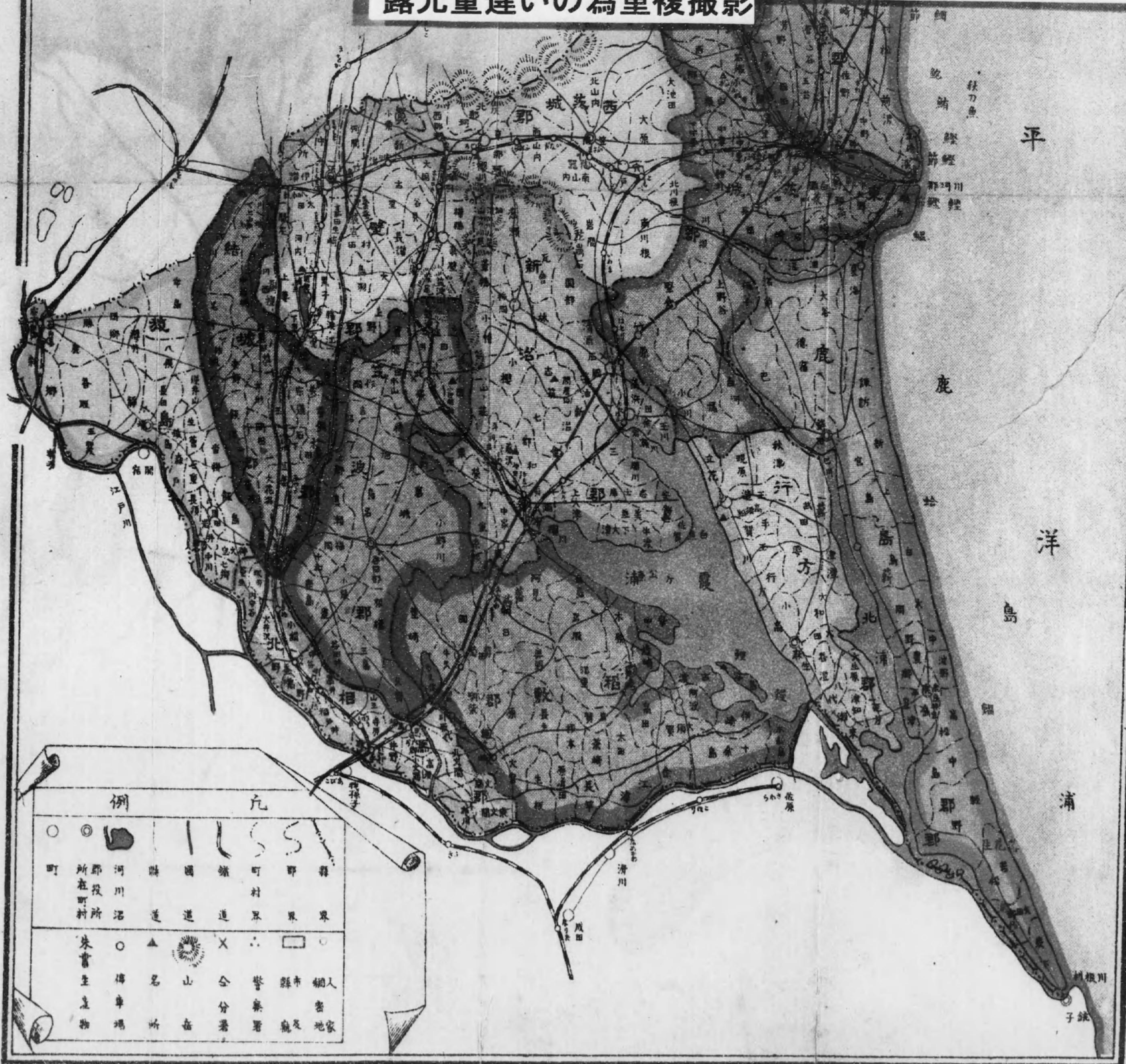
本邦里



太平



露光量違いの為重複撮影



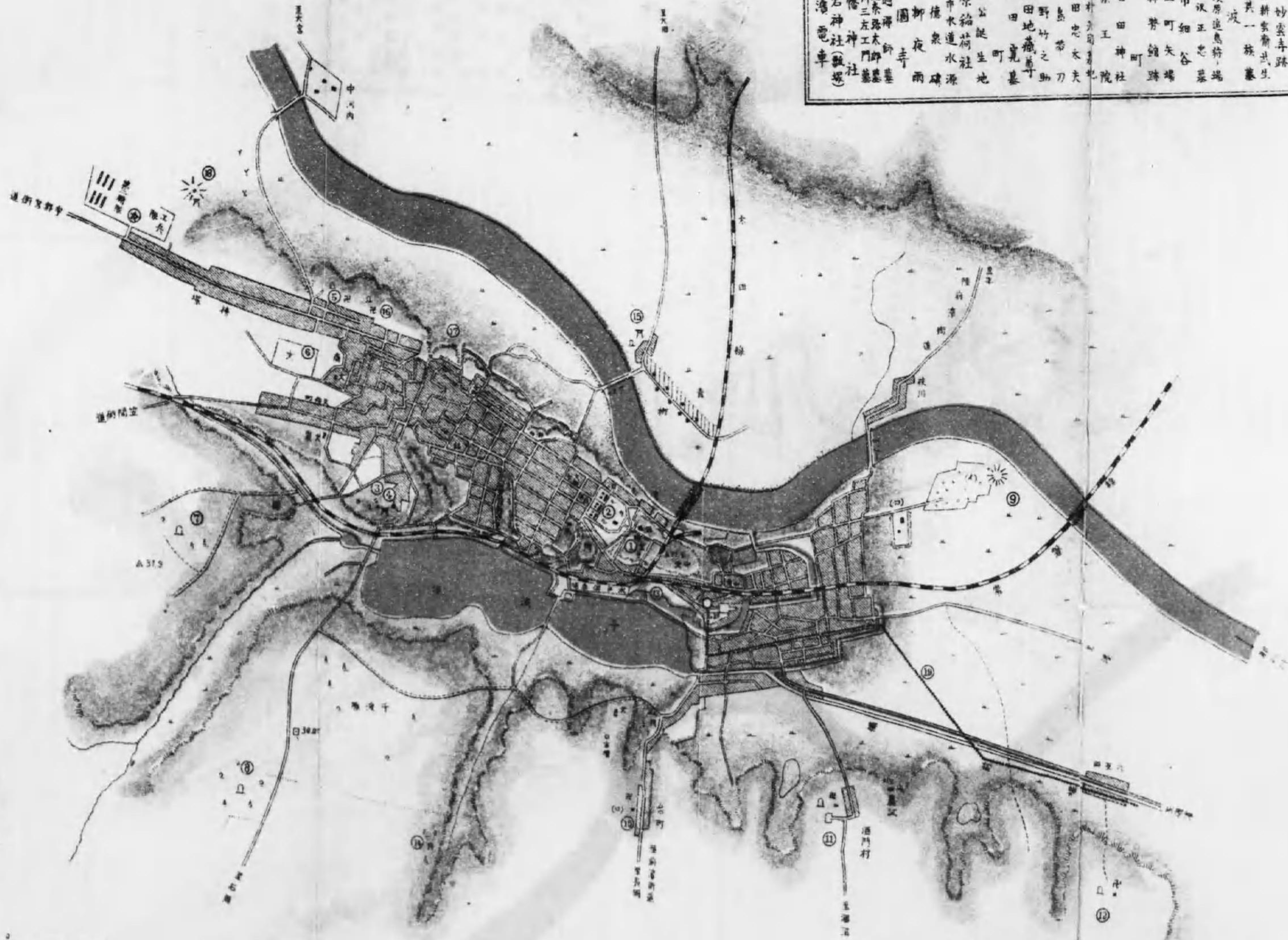
例		凡				
○	◎	◻		~	~	~
町	郡	河川	峠	國道	鐵道	町村界
所在	郡	沼	道	道	道	界
村	所	○	△	☼	×	○
		朱書	傳車	名山	公分署	縣市
		生	場	在	署	網人
		産				密地
		物				家



露光量違いの為重複撮影

水戸市及近郊略圖

①	水戸城址	②	水戸公園	③	水戸市役所	④	水戸市立第一中學校	⑤	水戸市立第二中學校
⑥	水戸市立第三中學校	⑦	水戸市立第四中學校	⑧	水戸市立第五中學校	⑨	水戸市立第六中學校	⑩	水戸市立第七中學校
⑪	水戸市立第八中學校	⑫	水戸市立第九中學校	⑬	水戸市立第十中學校	⑭	水戸市立第十一中學校	⑮	水戸市立第十二中學校
⑯	水戸市立第十三中學校	⑰	水戸市立第十四中學校	⑱	水戸市立第十五中學校	⑲	水戸市立第十六中學校	⑳	水戸市立第十七中學校
㉑	水戸市立第十八中學校	㉒	水戸市立第十九中學校	㉓	水戸市立第二十中學校	㉔	水戸市立第二十一中學校	㉕	水戸市立第二十二中學校
㉖	水戸市立第二十三中學校	㉗	水戸市立第二十四中學校	㉘	水戸市立第二十五中學校	㉙	水戸市立第二十六中學校	㉚	水戸市立第二十七中學校
㉛	水戸市立第二十八中學校	㉜	水戸市立第二十九中學校	㉝	水戸市立第三十中學校	㉞	水戸市立第三十一中學校	㉟	水戸市立第三十二中學校
㊱	水戸市立第三十三中學校	㊲	水戸市立第三十四中學校	㊳	水戸市立第三十五中學校	㊴	水戸市立第三十六中學校	㊵	水戸市立第三十七中學校
㊶	水戸市立第三十八中學校	㊷	水戸市立第三十九中學校	㊸	水戸市立第四十中學校	㊹	水戸市立第四十一中學校	㊺	水戸市立第四十二中學校
㊻	水戸市立第四十三中學校	㊼	水戸市立第四十四中學校	㊽	水戸市立第四十五中學校	㊾	水戸市立第四十六中學校	㊿	水戸市立第四十七中學校
㋀	水戸市立第四十八中學校	㋁	水戸市立第四十九中學校	㋂	水戸市立第五十中學校	㋃	水戸市立第五十一中學校	㋄	水戸市立第五十二中學校
㋅	水戸市立第五十三中學校	㋆	水戸市立第五十四中學校	㋇	水戸市立第五十五中學校	㋈	水戸市立第五十六中學校	㋉	水戸市立第五十七中學校
㋊	水戸市立第五十八中學校	㋋	水戸市立第五十九中學校	㋌	水戸市立第六十中學校	㋍	水戸市立第六十一中學校	㋎	水戸市立第六十二中學校
㋏	水戸市立第六十三中學校	㋐	水戸市立第六十四中學校	㋑	水戸市立第六十五中學校	㋒	水戸市立第六十六中學校	㋓	水戸市立第六十七中學校
㋔	水戸市立第六十八中學校	㋕	水戸市立第六十九中學校	㋖	水戸市立第七十中學校	㋗	水戸市立第七十一中學校	㋘	水戸市立第七十二中學校
㋙	水戸市立第七十三中學校	㋚	水戸市立第七十四中學校	㋛	水戸市立第七十五中學校	㋜	水戸市立第七十六中學校	㋝	水戸市立第七十七中學校
㋞	水戸市立第七十八中學校	㋟	水戸市立第七十九中學校	㋠	水戸市立第八十中學校	㋡	水戸市立第八十一中學校	㋢	水戸市立第八十二中學校
㋣	水戸市立第八十三中學校	㋤	水戸市立第八十四中學校	㋥	水戸市立第八十五中學校	㋦	水戸市立第八十六中學校	㋧	水戸市立第八十七中學校
㋨	水戸市立第八十八中學校	㋩	水戸市立第八十九中學校	㋪	水戸市立第九十中學校	㋫	水戸市立第九十一中學校	㋬	水戸市立第九十二中學校
㋭	水戸市立第九十三中學校	㋮	水戸市立第九十四中學校	㋯	水戸市立第九十五中學校	㋰	水戸市立第九十六中學校	㋱	水戸市立第九十七中學校
㋲	水戸市立第九十八中學校	㋳	水戸市立第九十九中學校	㋴	水戸市立第一百中學校	㋵	水戸市立第一百零一中學校	㋶	水戸市立第一百零二中學校



露光量違いの為重複撮影

水戸市及近郊略圖

①	水戸市	②	水戸市	③	水戸市	④	水戸市	⑤	水戸市
⑥	水戸市	⑦	水戸市	⑧	水戸市	⑨	水戸市	⑩	水戸市
⑪	水戸市	⑫	水戸市	⑬	水戸市	⑭	水戸市	⑮	水戸市
⑯	水戸市	⑰	水戸市	⑱	水戸市	⑲	水戸市	⑳	水戸市
㉑	水戸市	㉒	水戸市	㉓	水戸市	㉔	水戸市	㉕	水戸市
㉖	水戸市	㉗	水戸市	㉘	水戸市	㉙	水戸市	㉚	水戸市
㉛	水戸市	㉜	水戸市	㉝	水戸市	㉞	水戸市	㉟	水戸市
㊱	水戸市	㊲	水戸市	㊳	水戸市	㊴	水戸市	㊵	水戸市
㊶	水戸市	㊷	水戸市	㊸	水戸市	㊹	水戸市	㊺	水戸市
㊻	水戸市	㊼	水戸市	㊽	水戸市	㊾	水戸市	㊿	水戸市







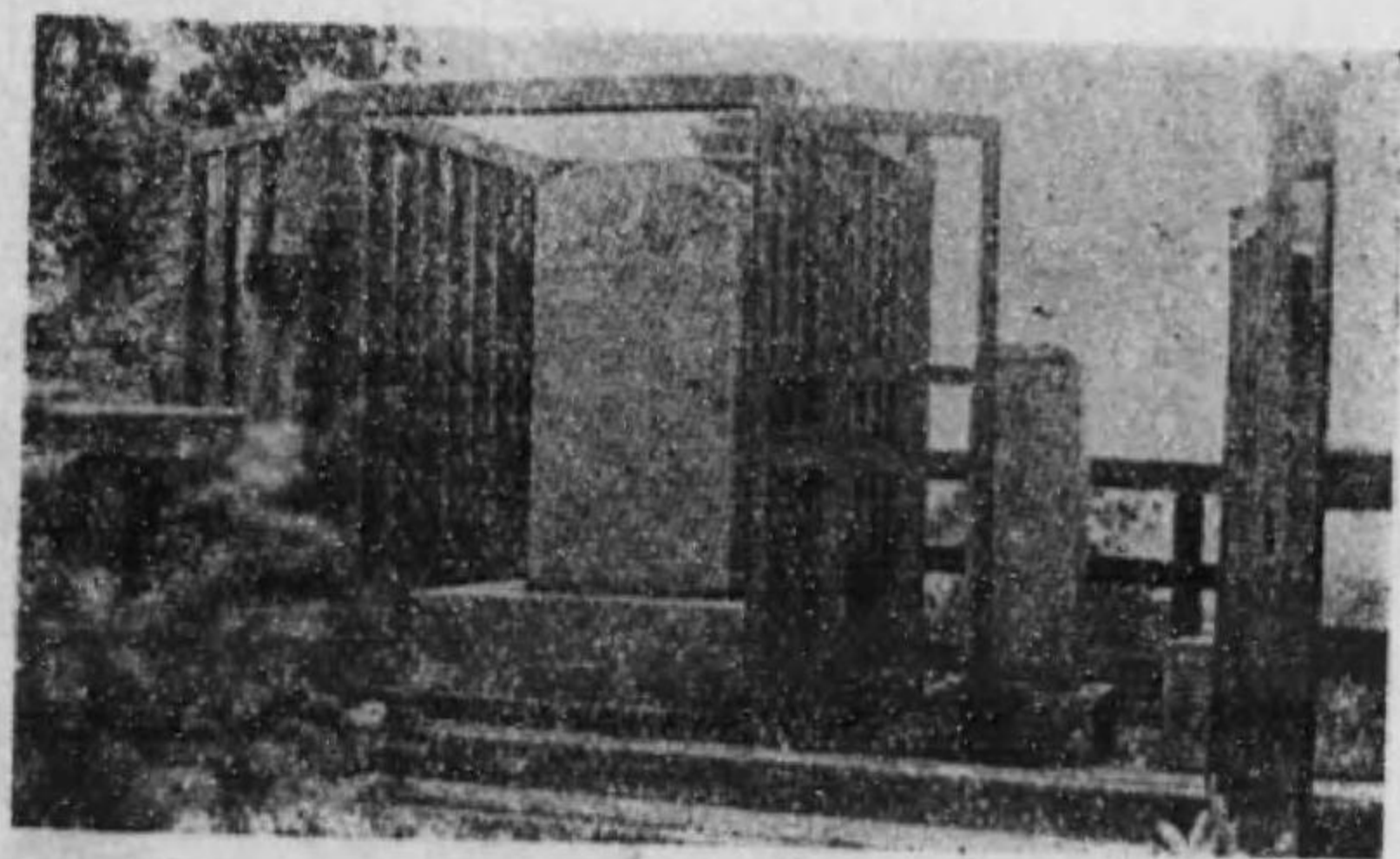
山西莊



大洗



水戸市常磐公園



全藤田東湖墓



11



上【東茨城郡】廣 浦

下【西茨城郡】笠間稻荷神社

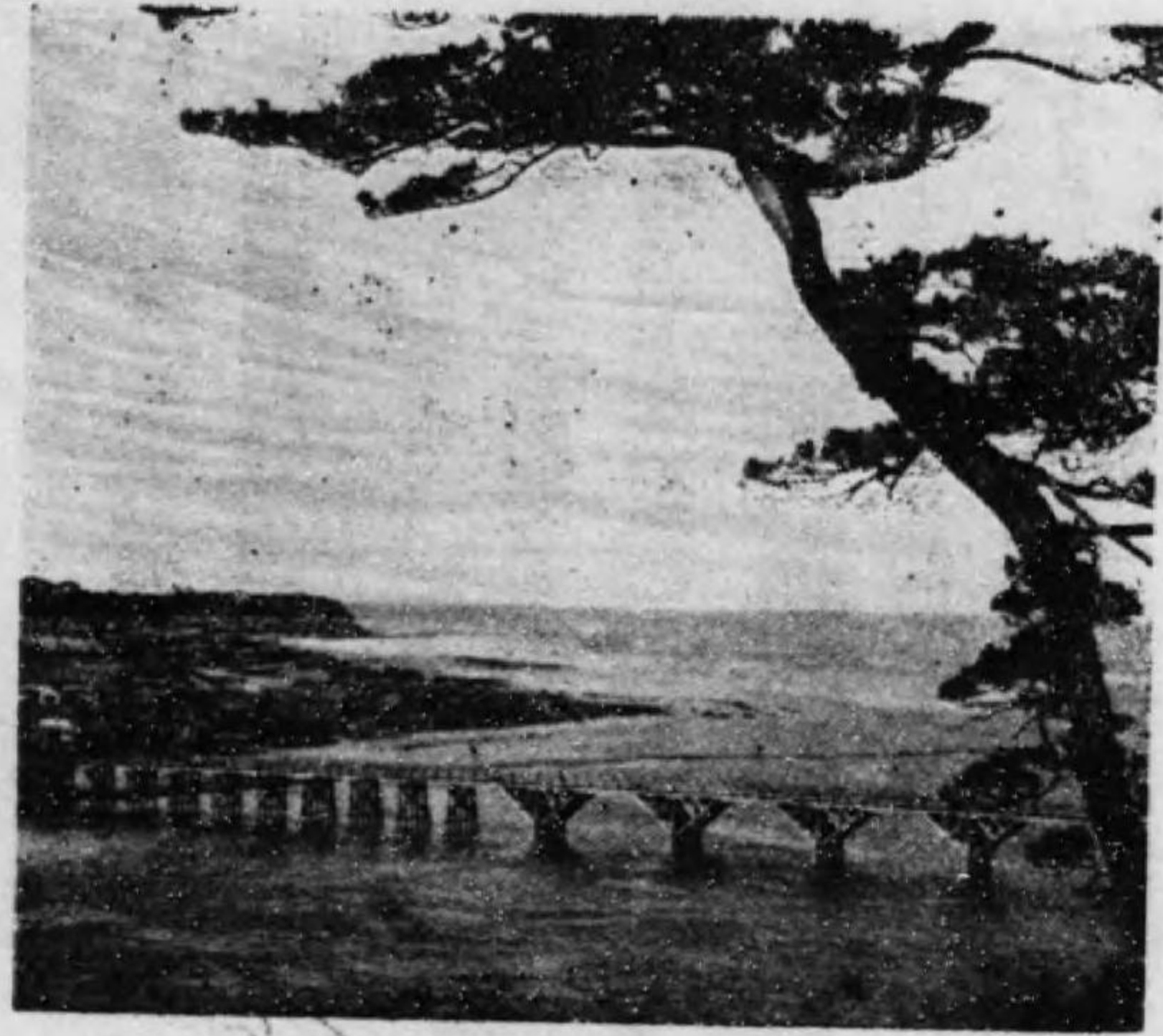




嵐晴松村【郡珂那】



川 櫻【郡城茨西】



四

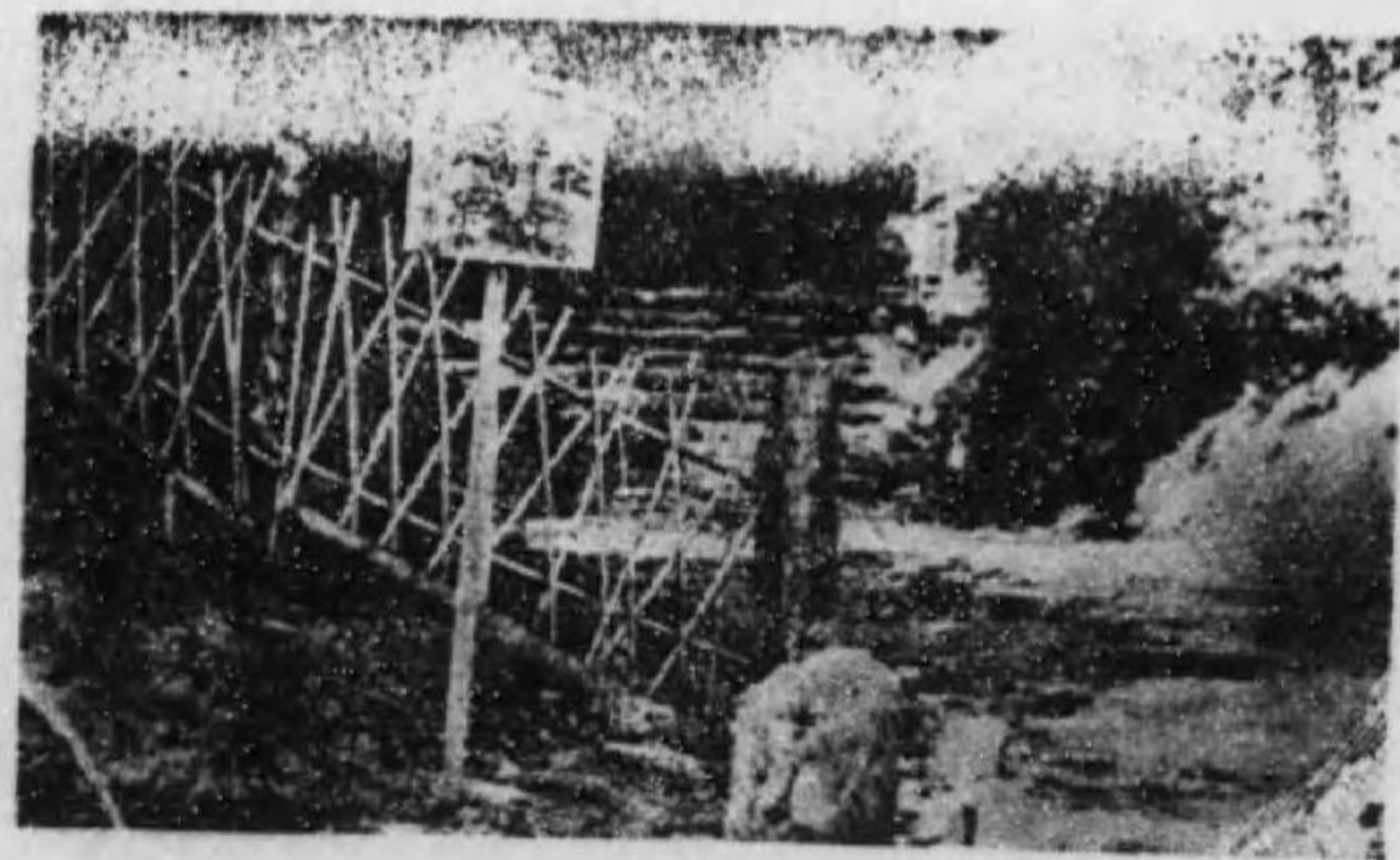
口河の湊【郡珂那】



烟草煙砂金【郡慈久】



瀧の田袋【那慈久】



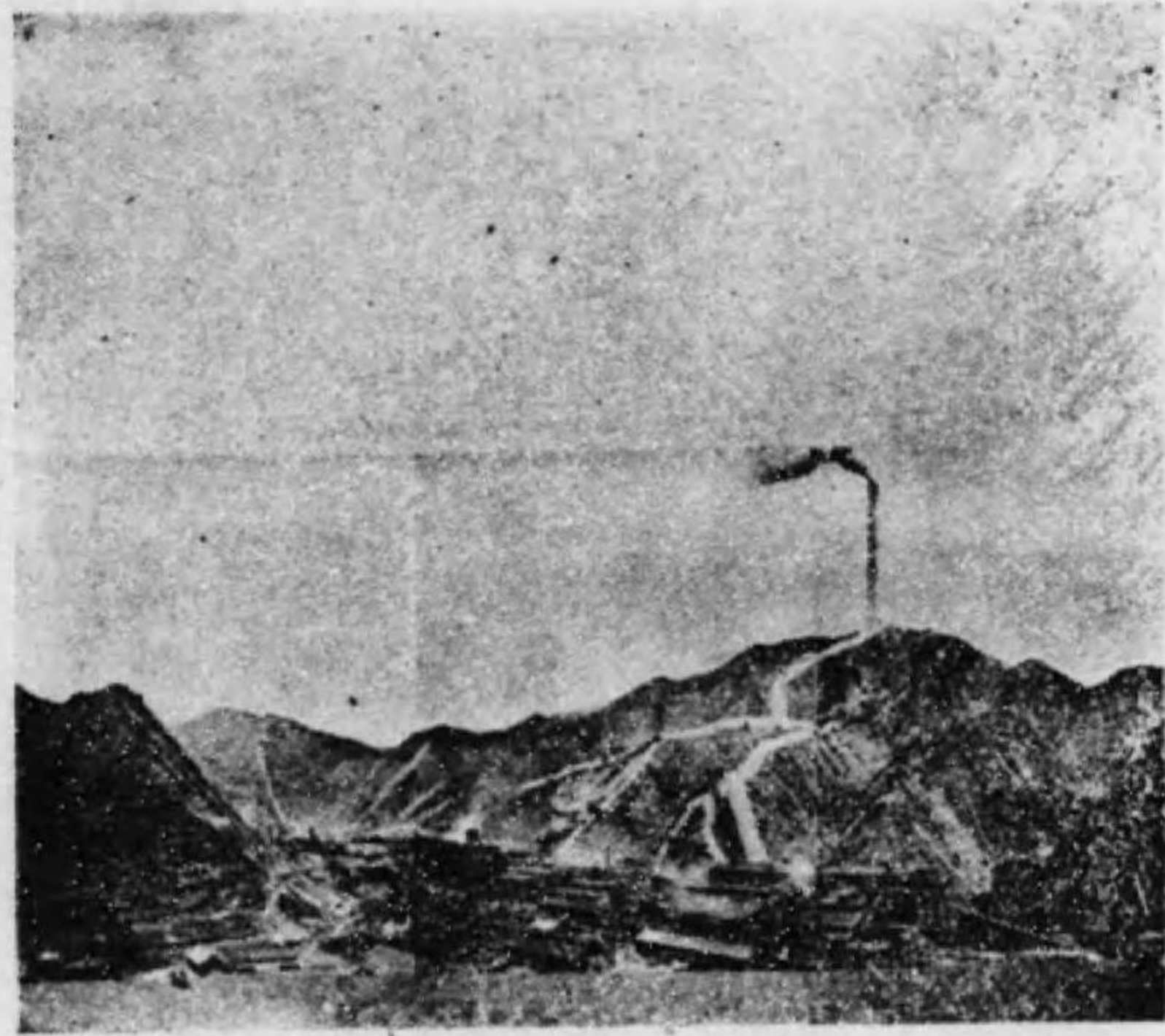
山龍瑞全



【不明】



【不明】



山嶺立日【郡賀多】



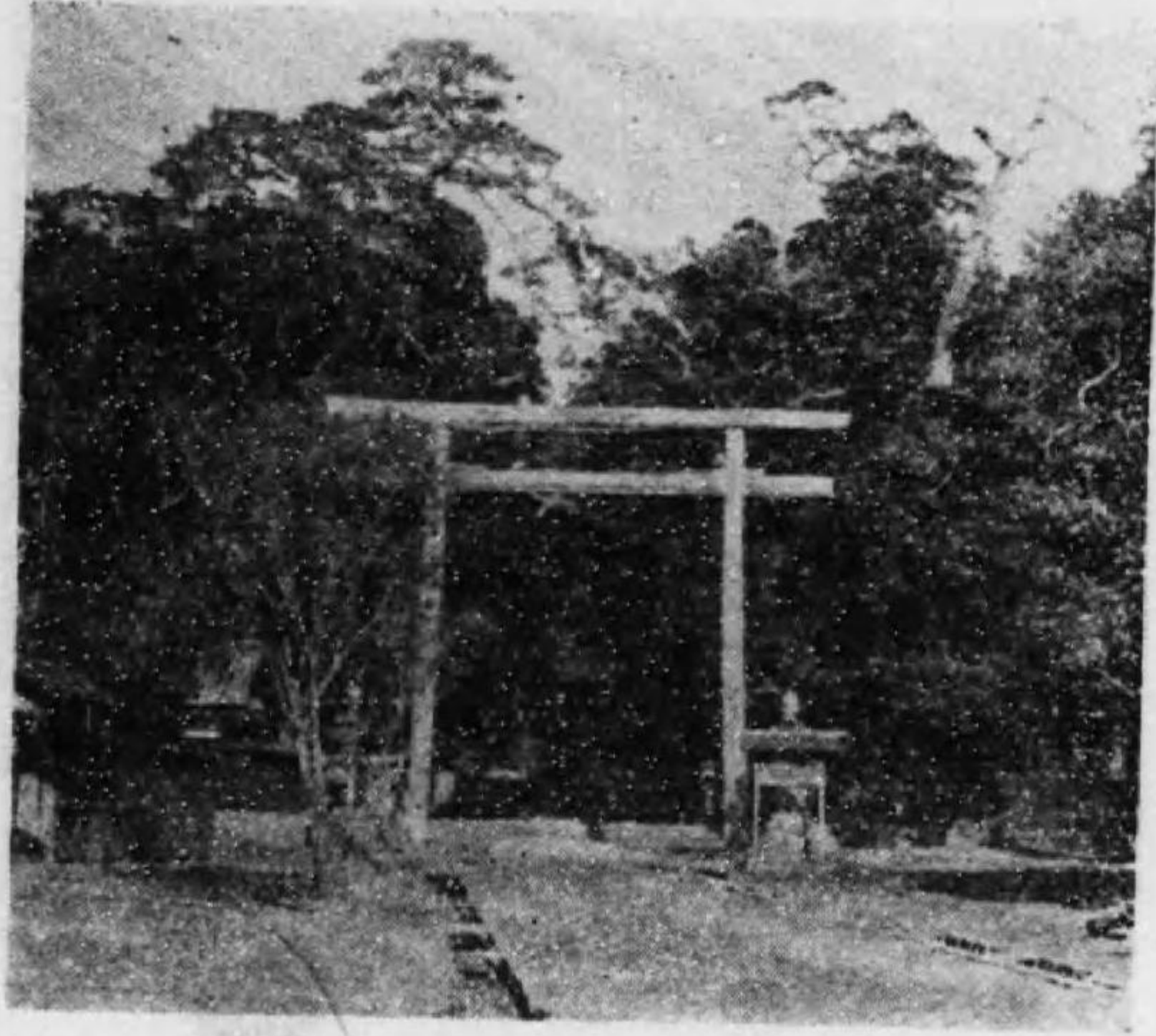
景の浦五 全



【郡賀多】香取の島



全 郡 山



鹿島神社



全銚子河口

七

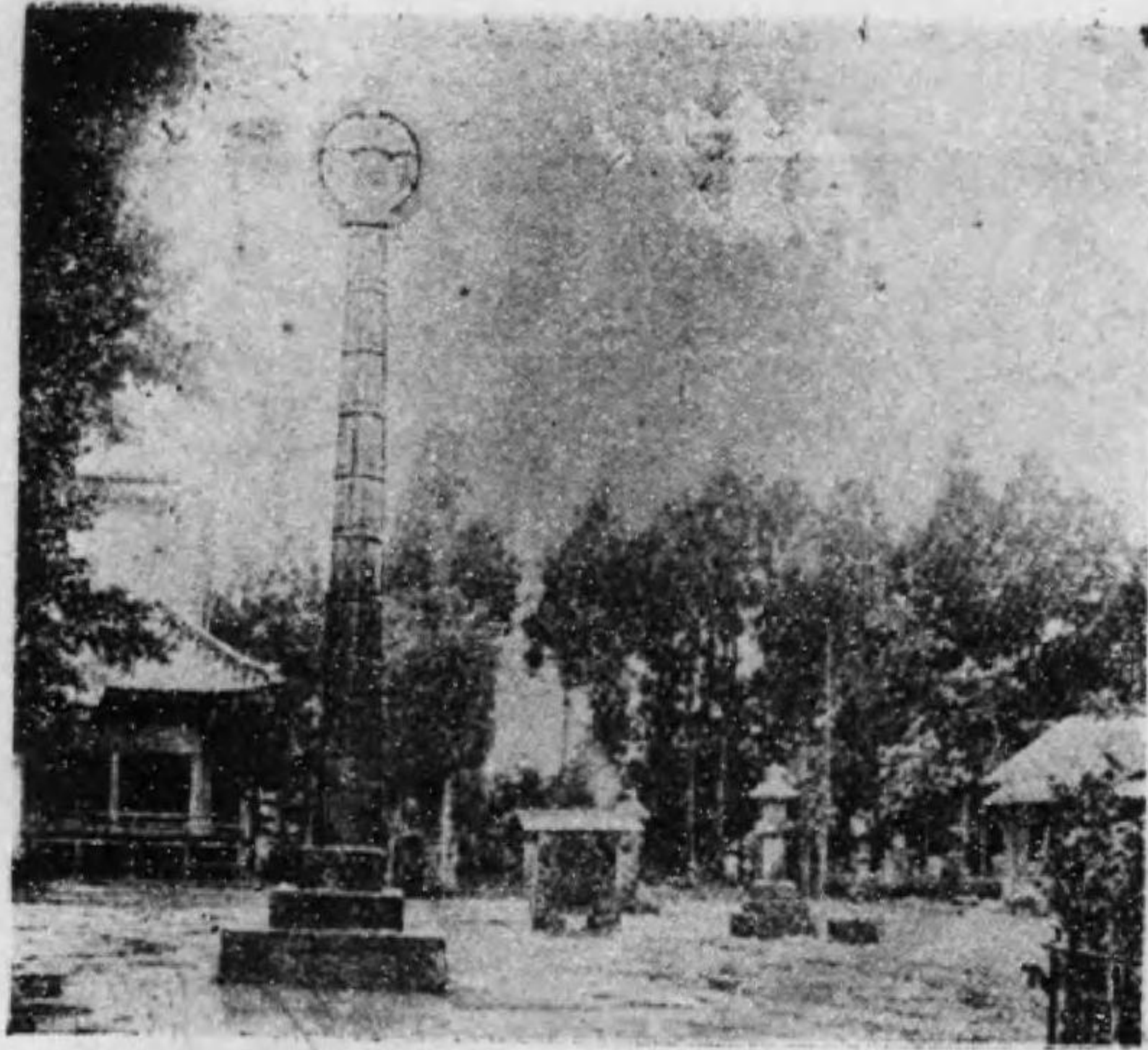
六



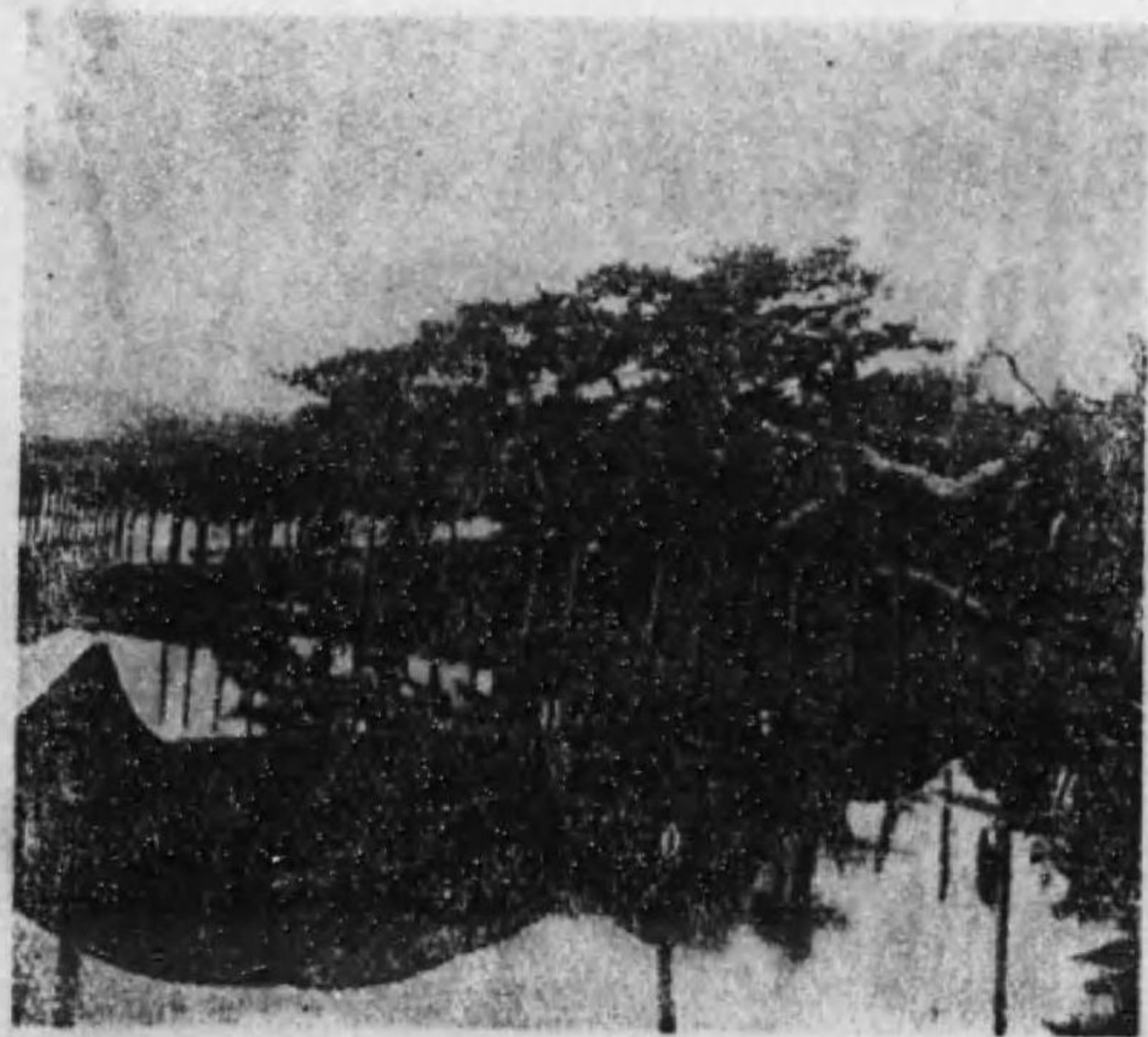
【不明】



【不明】



碑念紀冠元【郡方行】

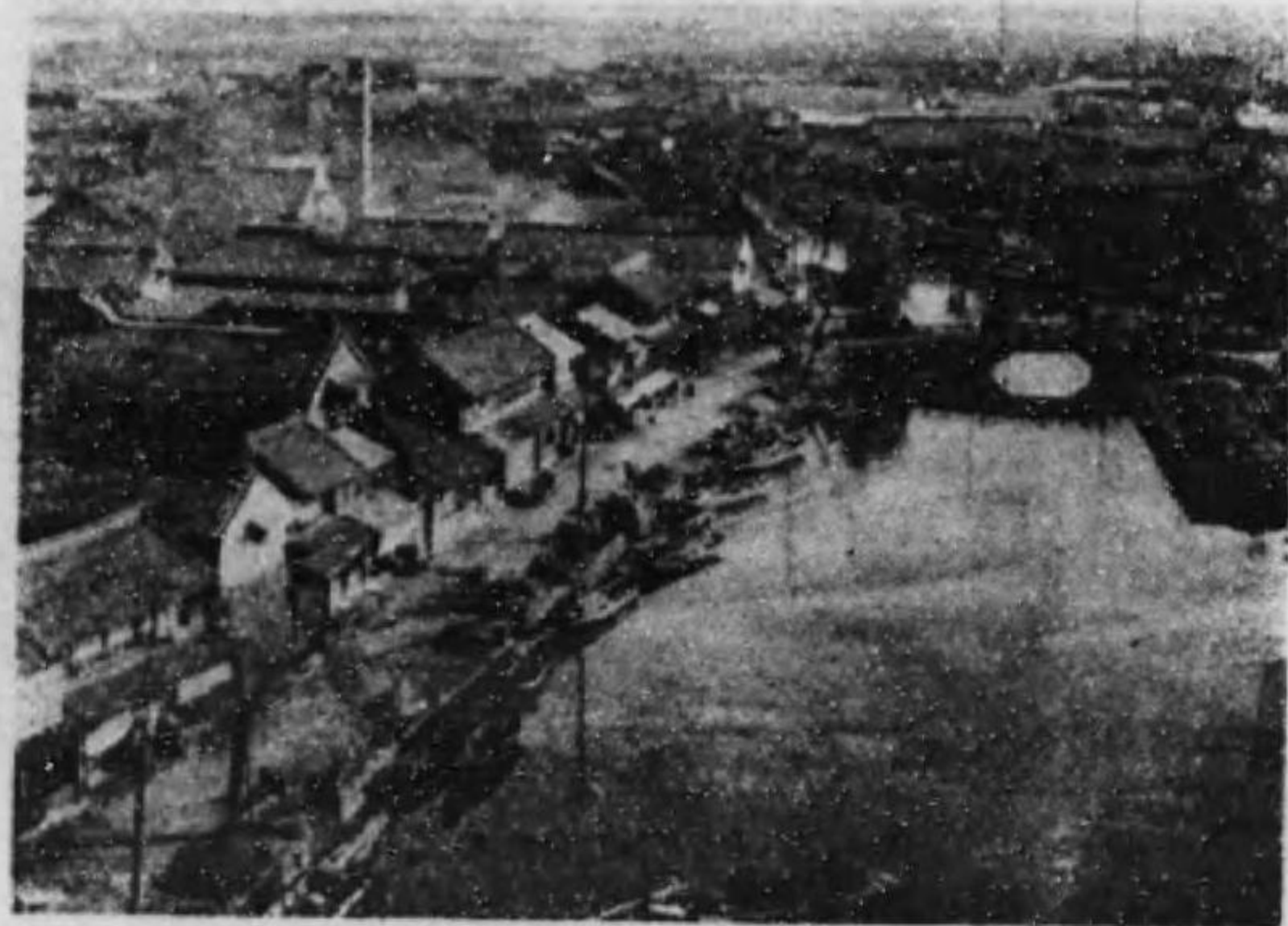


松の須高 全





島 浮【郡敷稻】



部一の町浦土【郡治新】



+

崎見藍【郡治新】



墓藏林宮間【郡波筑】

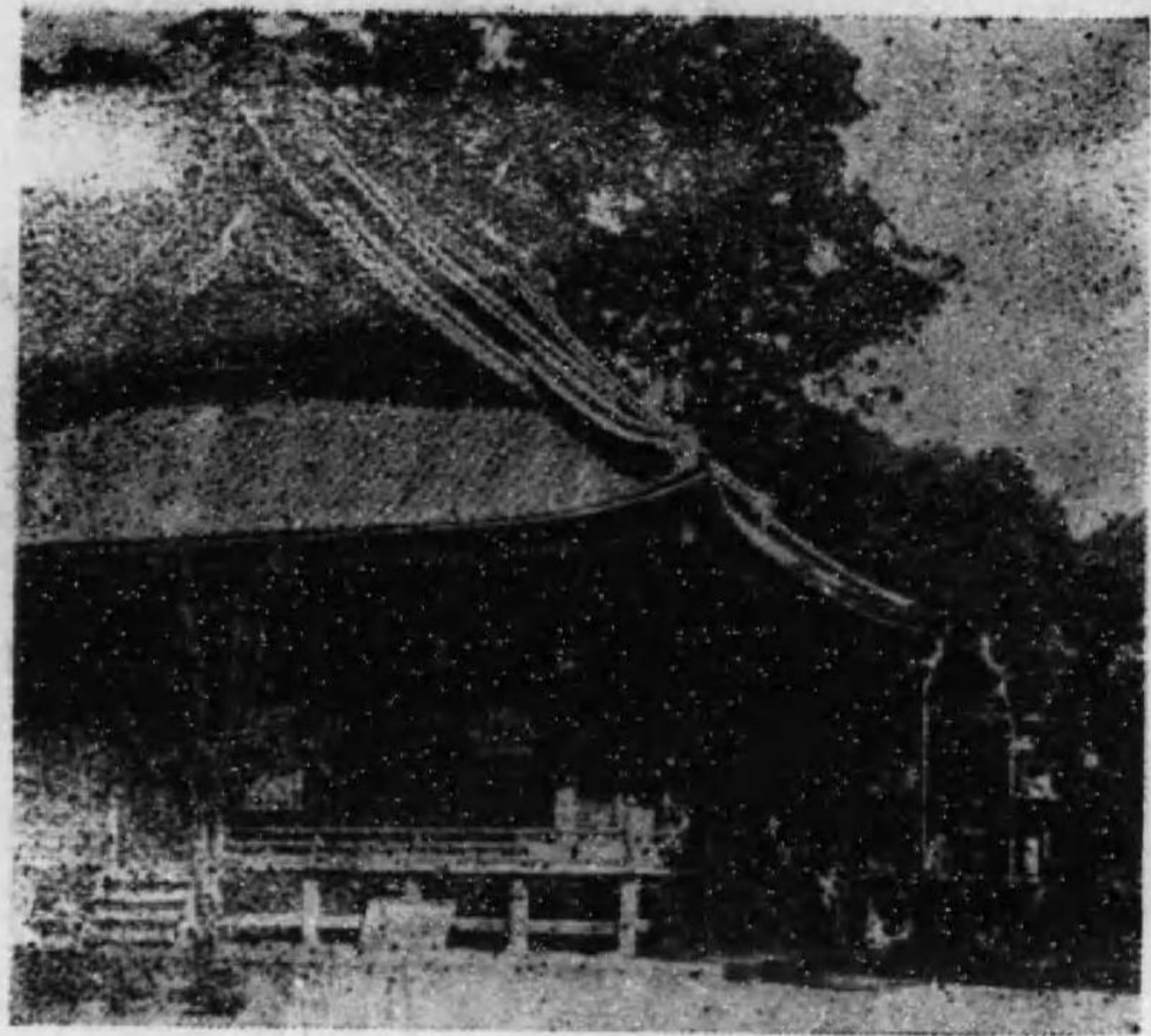


【郡治新】



【郡治新】





山引雨【郡壁真】



跡城關全

十一

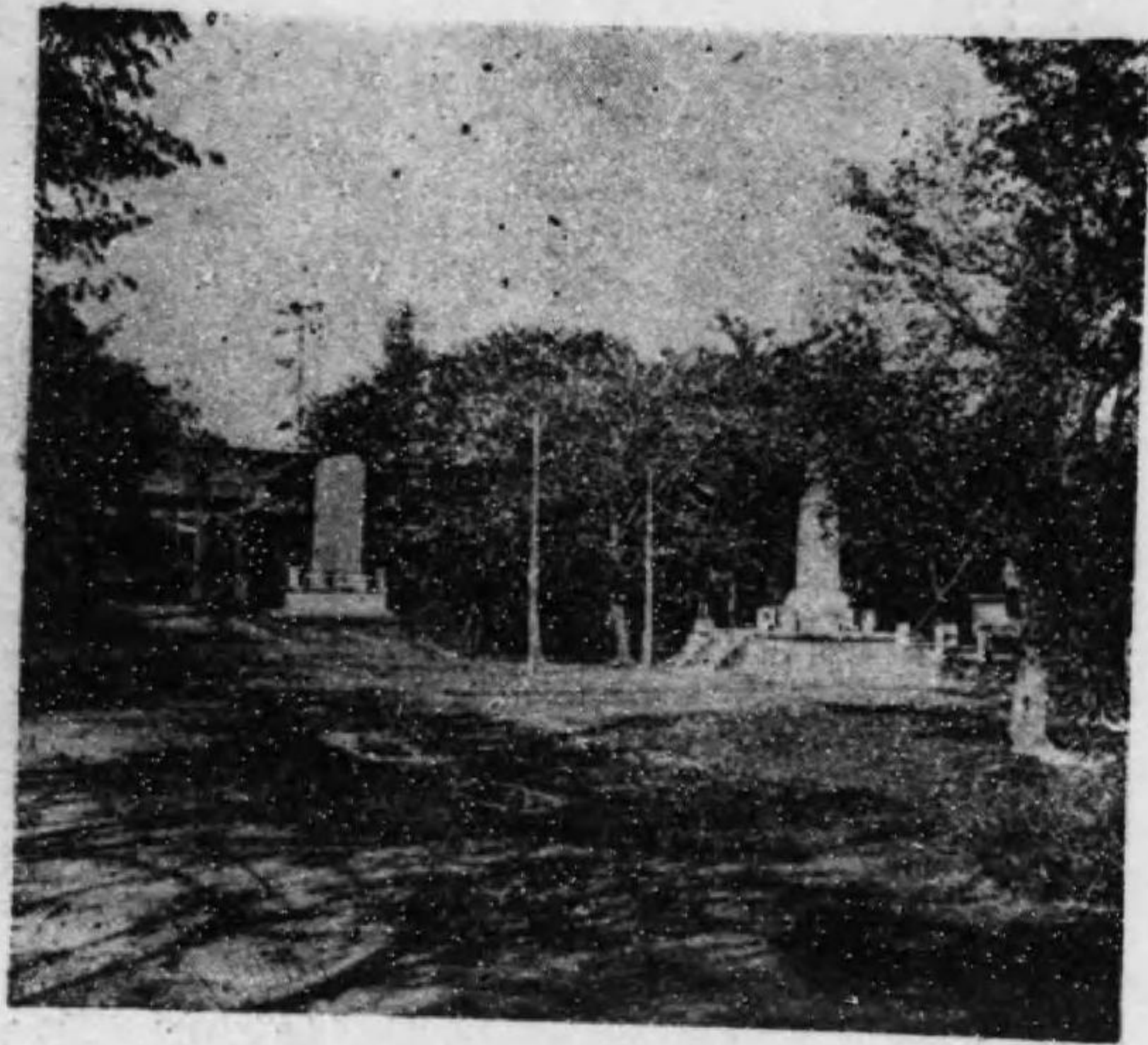
+



【郡壁真】



【郡壁真】



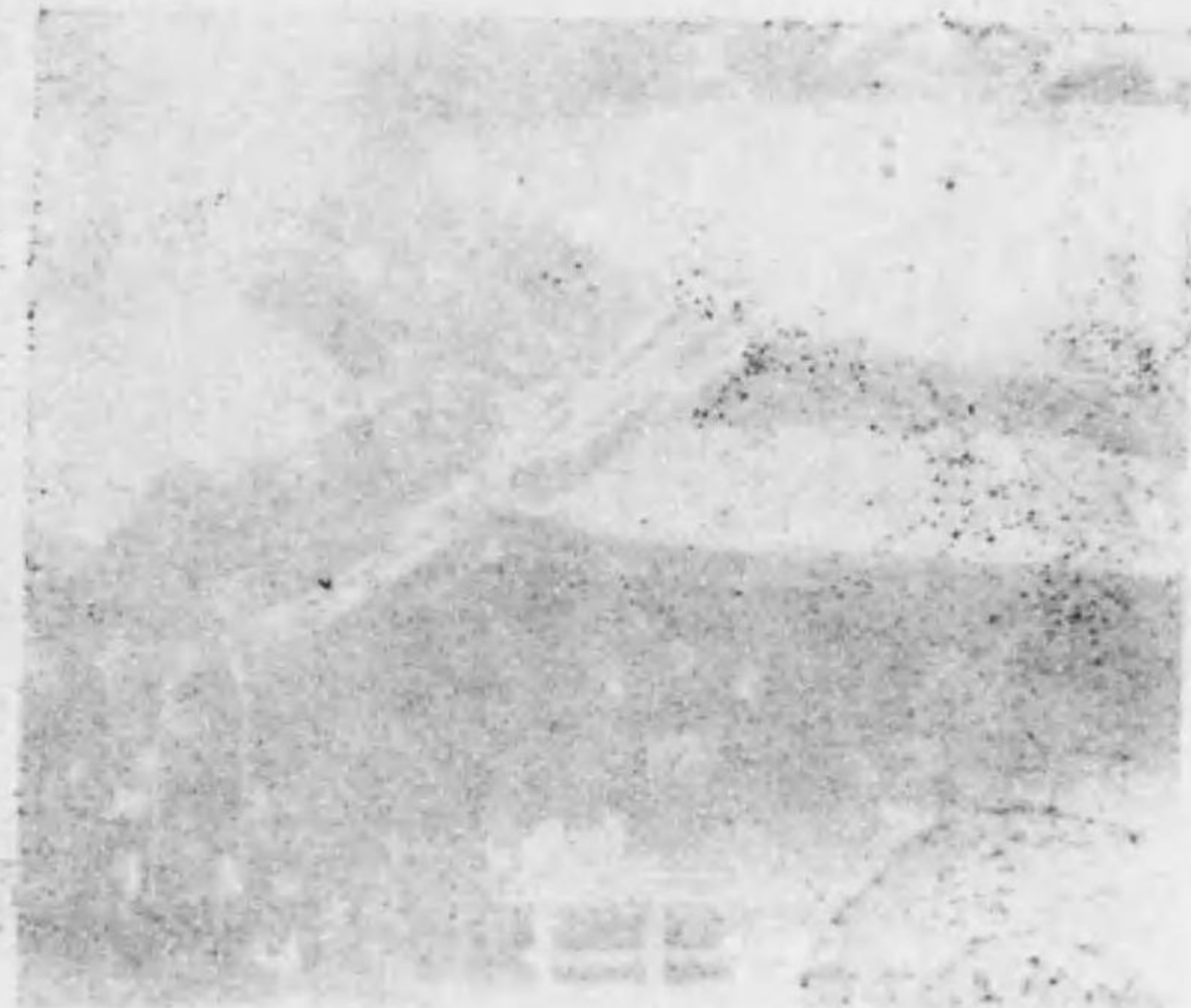
所圖在園行【郡城結】



片河津宗 全

十二

十一



【高野】第 行 出



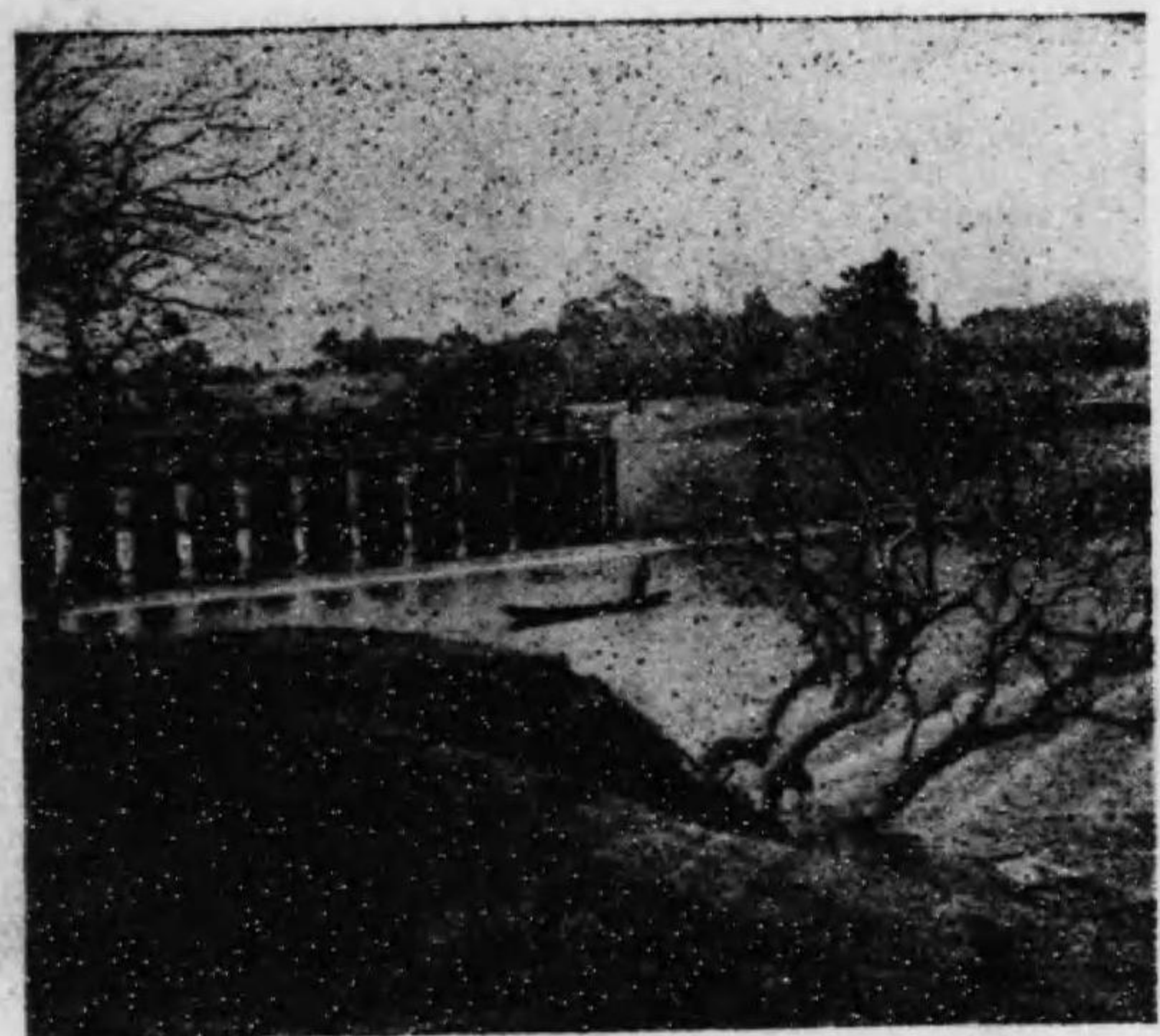


【郡島猿】 熊澤菴山墓

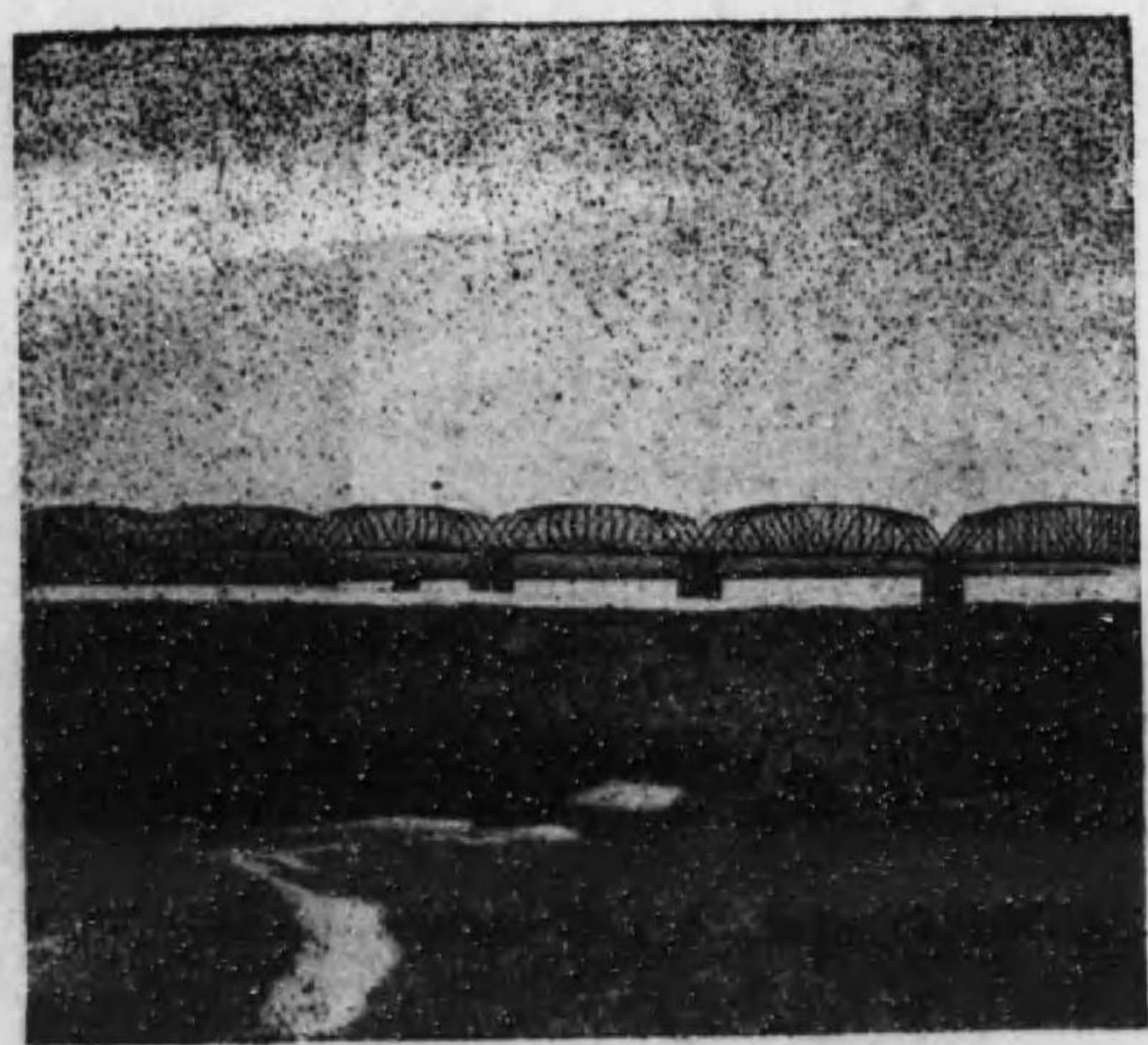


全茶園

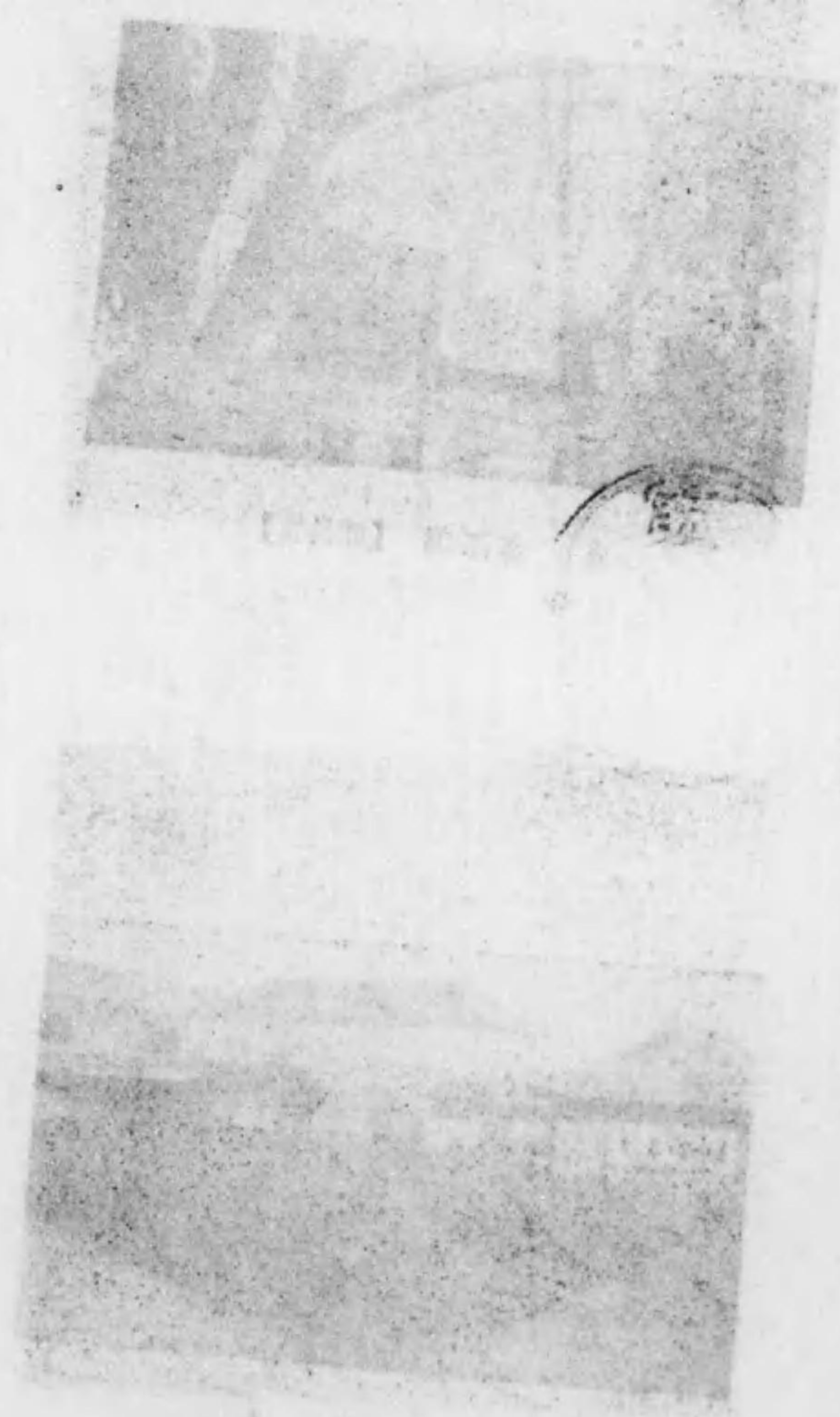




堰 岡【郡馬相北】



橋 鐵 手 取 (全)





【大洗町】



【大洗町】

目次

一、口 繪……………(筑波山 大洗 西山山莊)……………一〇

二、茨城縣概説……………一

三、水 戸 市……………常磐公園 弘道館……………三三

四、東茨城郡……………大洗 廣浦 小松寺 大貫町 小川町 石塚町……………八三

五、西茨城郡……………笠間町 稻田 富谷觀音……………一三五

六、那 珂 郡……………湊町 村松 大宮町 平磯町……………一五二

七、久 慈 郡……………瑞龍山 袋田 瀧大子町 久慈濱 金砂山 太田町 西山……………一七七

八、多 賀 郡……………河原子町 日立 鐵山 松原町 大津町 平湯町……………一九九

(11)

九、鹿島郡	銚田町 鹿島町 鹿島神宮	二三
一〇、行方郡	麻生町 玉造町 潮來町	二五七
一六、稻敷郡	龍ヶ崎 江戸町 浮島	二七五
一七、新治郡	眞鍋町 高濱町 石岡町 柿岡町 土浦町	二八九
一三、筑波郡	谷田部町 小田村 北條町 筑波町	三三七
一四、眞壁郡	下妻町 眞壁町 下館町	三五五
一五、結城郡	結城町 宗道村 石下町 水海道町	三六七
一六、猿島郡	古河町 岩井町 檜町	四〇九
一七、北相馬郡	守谷町 取手町 相馬町 布川町	四一七

【目次終り】

# 茨城大觀



縣

**位置・境域** 本縣は關東平野の東北隅に位し、東經百三十九度四十一分五秒に起つて百四十度五十分四十九秒に盡き、北緯三十五度四十四分二十八秒に始つて三十六度五十五分四十五秒に終る。而して東は太平洋に面し、西は栃木縣、南は千葉埼玉の二縣、北は福島縣に接してゐる。廣袤東西二十六里二十六町、南北三十三里二十二町、周圍百二十六里八町、面積三百九十八方里四四。之を

一市十四郡に分ち、縣廳を水戸市に置いて、常陸全國一市十一郡（水戸市・東茨城・西茨城・那珂・久慈・多賀・鹿島・行方・稻敷・新治・筑波・眞壁、）下總三郡（結城・猿島・北相馬）を管轄する。

**地勢・氣象** 本縣は北部は阿武隈山脈の餘勢を承け、八溝・久慈・多賀の諸山脈が連亘してゐる。而して八溝山脈は南走して尺丈山・鷲子山等栃木縣との境に起伏し、一たび那珂川に中斷されても、餘脈尙西南に延びて筑波・加波・葦穂等の諸山となる。又八溝山の東、久慈川を隔てて太平洋との間には久慈多賀の諸山脈即ち男體山・東西金砂山・堅割山・高鈴山・眞弓山等重疊盤踞してゐる。故に平地が極めて少ない。されど東海に近づくに従ひ田畝漸く開け、其の間久慈川里川等貫流して灌漑の便をなしてゐる。西南部地方は次第に廣闊とな

つて關東平野を形成し、田園林野遠く相連り、其の間を縫つて戀瀬川櫻川及び小貝・鬼怒・利根等の諸川が流れ、或は霞ヶ浦に入り或は合流して海に注ぐ。又此の平野は土地が一般に低下であるから湖沼が隨所に存してゐる。霞ヶ浦は其の最も大なるもので、之に次いで北浦・長井戸沼・牛久沼等がある。縣の東方一帯は太平洋に臨んでゐるが、其の沿岸は屈曲極めて少なく、殊に鹿島灘沿岸は砂濱連延十八里、此の間些の出入がない。唯久慈川口以北は往々にして多少突出してゐるところもあるが、概ね單調、海深も亦海岸から次第に増加する如き状態にあるので、沿岸一帯良港灣に乏しいのである。

縣の廣袤頗る長距離に亘つてゐるが爲に、其の兩端に於ける氣候風土は幾分の相違がある。久慈多賀の北部福島縣に接續せる地方に於ける初霜の時季は十月





始めて國造縣主を置かれ、大化改新郡縣の制を定められた時、改めて國司を置かれた。其の後國司の勢衰へ、東國の地源平兩家の武人其勢力を扶植するに及んで、遂に平將門亂を下總に起し、平忠常武を上總下總に用ひ、東國屢々兵革の區となつた。後源頼朝の起るに及んで或は進んで之に屬し、或は其の攻略する所となつて、東國悉く其の命を奉ずるに至つた。南北朝時代には足利尊氏先づ武藏・常陸・下總の守護に任せられ、尋いで關東大部の土地を占領したのによつて、大勢は北朝に傾き、佐竹貞義（太田）、大掾盛幹（石岡）等は足利に黨し、南朝に屬するものは那珂通辰（那珂西）、關宗祐（關館）、下妻政泰（下妻）等に過ぎなかつた。北畠親房・楠正家等來つて義を唱へ力を奮つたが遂に意の如くならず、所在官軍皆破れて、正家は陸奥へ走り親房等も遂に芳野に歸つた。

鎌倉管領足利持氏が執權上杉氏と相抗するに及び、結城氏朝は持氏の遺孤を結城に奉じ、管領足利成氏は古河に據るなど、下總の地また兵革を見るに至つた。戰國の時代地方の豪族相攻伐するや、常陸の江戸氏は大掾氏を滅し、佐竹氏は江戸氏を滅し、逐次水戸城に據つて地方に雄視した。江戸時代に於て常總の地は諸侯領地・幕府直轄地及び旗下采邑の三者に分つた。今幕末に於ける諸侯領地を擧げると、

水戸藩（三十五万石）	土浦藩（九万五千石）	笠間藩（八万石）
下館藩（二萬石）	石岡藩（二萬石）	谷田部藩（一萬七千石）
牛久藩（一萬七千石）	下妻藩（一萬石）	麻生藩（一萬石）
古河藩（八萬石）	結城藩（一萬八千石）	

右の外、城郭は他縣の地域にあつて領地を本縣地域内に有する者は、川越藩  
 守山藩 仙臺藩 關宿藩 左倉藩 壬生藩 前橋藩 淀藩 高岡藩 峯山藩  
 長靜藩 小田原藩 一ノ宮藩 飯野藩 一橋家 田安家 山内家(高知藩  
 主分家)

明治維新以來松岡・志筑の二藩創建され、安戸藩は、元治元年幕府の讒を蒙り  
 領地を沒收されたのであつた。又守山藩が磐城から常陸松川に移つて松川藩と  
 稱し、大綱藩が上總から常陸龍ヶ崎に移つて龍ヶ崎と稱し、谷田部藩が下野に  
 徙つて茂木藩と稱するなどの異動があり、以て廢藩置縣の時に及んだ。

又幕府直轄地と旗下采邑は各地に散在したが、維新後若森・宮谷・葛飾の三縣  
 を置いて分治せしめられた。若森縣は今の筑波郡大穗村大字若森に治所を置き  
 宮谷縣は上總、葛飾縣は下總(何れも今の千葉縣地域内)に之を置いた。

四年七月藩を廢して舊藩名を縣名に改め、尋いで十一月茨城縣を設置され、同  
 時に新治・印旛の二縣を置かれた。而して今の常陸國多賀・久慈・那珂・茨城・  
 眞壁の五郡は茨城縣之を管し、同國新治・筑波・河内・信太・行方・鹿島の六  
 郡は新治縣之を管し、下總國猿島・結城・岡田・豊田の四郡及び葛飾・相馬二  
 郡の利根川以北の地は印旛縣が之を管した。六年六月印旛縣は千葉縣と改稱し  
 八年五月新治縣を廢して其の所管の郡を本縣に併せ、又千葉縣所管の内上記の  
 郡を本縣に屬せしめた。

十一年茨城郡を東西に分割し、相馬郡を北相馬郡、葛飾郡を西葛飾郡と改稱し  
 た。二十二年四月市町村制の施行されるに及んで、東茨城郡の内を割いて水戸  
 市を置いた。二十九年四月 結城・岡田・豊田の三郡を廢して結城郡を置き、西

葛飾・猿島二郡を廢して猿島郡を置き、又信太・河内二郡を廢し其の區域の大部を以て稻敷郡を置き、一部を新治・筑波二郡に編入した。その他二十八年四月及び三十二年四月の二回に於て、本縣と千葉縣との間に境域を變更したる小異動があつた。

### 警 察

警察署十九、同分署八、警部三十五人、警部補三十八人、巡查七百四十八人、警察官一人に付人口千六百五十一人の割合である、大正十年に於ける強盜被害二十件、同窃盜屋内一千九百五十六件、屋外一千五十四件、詐欺恐喝一千四百一十一件、犯罪件數八千百三十七、檢舉件數八千百三十六、檢舉人員前科男二千

百三十六人、同女二十九人、微罪不檢舉男四十七人、女三人、初犯男五千百三十四人、女七百四十人、自殺者男百二十六人、女九十一人、過失死亡者汽車によるもの男十六人、女二人、失火四百三十二件、放火三十六件、雷及不審火四十五件、盜難貨幣被害十六萬七百六圓、發見貨幣一萬五千四百三十六圓、同衣類一千七百三十九點、同發見五百九十點、盜難家畜六百七點、同發見三十二點である。近年になつては大抵の僻村巡查駐在所には電話を通するに至つた、警察官殉職者の祭典は年々水戸に於て莊嚴に行はれて居る。

### 衛 生

近時公衆衛生の施設漸く進み、一般の衛生思想も高まり、清潔法の如きも、自

覺的に之を行ふもの比年多くなりつゝ、あれど傳染病の年々絶えざるは遺憾である。病院は私立のみにて二十二院あり、其他昨年赤十字病院が水戸に新設せられた。大正十年の統計では醫師七百七十八人、藥劑師九十一人、藥種商二百九十二、製藥者三十四、看護婦三百九十九人、齒科醫九十二人、醫師一人に對する人口は一千七百七十五人であつた、腸窒扶斯患者一千二百五十九人中死亡二百三十九人、赤痢患者百七十四人、内死亡九十一人、實扶淫利亞患者三百三十人、内死亡七十四人、検査壯丁一萬三千八百九十二人中トラホーム患者一千七百五十九人を算じた。

教 育

小●學●教●育●

學齡兒童就學督勵に就ては縣郡市町村を擧げて最も注意を加へ熱心獎勵の結果、就學の歩合は男九九、四四、女九八、八〇、計九九、一一一（大正十二年度）を算するに至つた。校數は尋常校百七十四、併置校三百八十一、高等小學校は一校、實業補習學校は町立五十八、村立四百四十二、計五百校を有し、小學教員は本科正教員男千六百二十三人、女四百二十三人、尋常本科正教員は男九百三十一人、女百十人、准教員男三百二十二人、女二十三人、專科正教員男七十六人、女三百八十五人、代用教員男三百七十一人、女二百二十人、學級數百に對する本正教員の數は七二、四三である、月俸の平均は本科正教員五十六圓六錢、專科正教員三十四圓三十三錢、准教員三十五圓八十四錢、代用教員二十七圓九十二錢、通計四十九圓三十七錢である。

●●●●●● 師範教育 縣立師範學校は男女二校とも水戸市内にあり。男校は舊水戸城内にあり、生徒定數一部三百二十名、二部三十名、乙種講習八十名で、教員數は二十二人、創立以來の卒業生本科一千九百七十八人、簡易科百六十人、講習科五百四十七人、女校は上市櫻町にあり、生徒數一部百六十名、二部四十名、教員は定數十三人である、創立以來の卒業生は一部五百七十九人、二部二百五十三人、男女兩師範共教員の學力補習事業をやり、縣教育會でも男女兩教員の養成に勉めつゝあるが、尙ほ農業教員養成所は縣立水戸農學校内にある。

●●●●●● 中等教育 は縣立で水戸、土浦、下妻、太田、龍ヶ崎、水海道、鉾田の七中學校あり、生徒定員計四千四百五十名、卒業生總計八千六百六十九人あり。高等女學校は水戸、土浦、下館、水海道、龍ヶ崎（實科）の五校あり。生徒定員計三

千名で、卒業生總計四千三百二十五人、工業學校は水戸市外吉田村にあり生徒定員四百名、卒業生計四百三十七人、商業學校は水戸上市柳小路にあり、生徒定員七百名、卒業生計七百八十四人、水戸農學校の外石岡、笠間、大子、鹿島、江戸崎、眞壁等に農學校あり、生徒定員計一千八百名、卒業生計五千五百七十七人、此外に盲啞學校（水戸上市金町）あり、來年度より縣立に昇格することになつて居る。

●●●●●● 各種學校 私立學校では、土浦盲啞學校、水戸學院、常總學院（土浦町）自南學舎（新治郡關川村）菁莪學館（水海道町）盈科學校（古河町）育成學校（岩井町）水戸好文女學校（水戸上市大阪町）大成裁縫女學校（水戸上市藤坂町）森田裁縫女學校（水戸市馬口勞町）常磐女學校（水戸上市常磐小路）其他多數



には受検者百人中の無學者は一、〇八となつた。受検者身幹は五尺六寸以上三百八人、五尺五寸以上六百七十六人、五尺四寸以上一千四百五十八人、五尺三寸以上二千四百二十九人、五尺二寸以上三千四十八人、五尺一寸以上二千七百五十八人、四尺八寸未満二百二十九人、海軍志願兵は五百十三人中合格三百四十一人、横須賀鎮守府管内中に於て本縣は年々多數の志願者と採用者とを示し居る。

赤十字社員は三萬九千六百六十七人、愛國婦人會員二萬一千九百九十九人を有す。

交通

國道三線を有し、延長は三十九里二十一町、郡道の延長は百二十三里二十四町

里道の延長は三千四百七十四里十九町ある。鐵道は左の如くなる。

海岸線	八十九哩五	水戸鐵道(本支線)	二十哩四
奥羽線	五哩三	龍ヶ崎鐵道	二哩八
水戸線	二十八哩八	湊鐵道	五哩一
七井線	五哩四	水戸鐵道(支線)	十四哩七
郡水線	七哩三	常總鐵道	三十二哩九
其他工事中		筑波鐵道	二十四哩九

其他參宮鐵道は石岡より鹿島に至るべく、茨城鐵道は水戸より澤山に至るべくいづれも工事中に屬する。

電車は水戸磯濱間を運轉する、又磯濱鉾田間の軌道鐵道も目下工事中である。





林産物	一八、〇二八、〇三六	鑛産物	一一、八八二、三三二
水産物	八、三八九、六〇六	工産物	四八、三七六、八七七
合計	二三八、〇七四、五二〇		

数のを示してゐる。

●農業 米を以て生産の首位とし、平年作百八十六万二千三百五十八石に達す、之に次ぐは麥で、平年作百五十一万六千二百三十二石を産す。その他重なる物を表示すると、

大豆	石高	一三六、八七一石	價額	四、〇五二、六七四円
甘藷		三九、〇一一、九〇五石		五、一三六、七五五
葉煙草		二、六五八、〇八七		八、五五〇、四二七

臨時農業改良の状況は種々の奨励誘導の施設と、一般農事思想の發達と相俟つて、年々進歩の趨勢を示し、牛馬耕の應用、肥料の改良、害虫の驅除等着々實行されつゝあり。就中耕地整理は大正九年までに二万六千八百五十五町の整理を完了し、續々と之が施行認可数を加へつゝあり。

穀物検査は明治四十四年より産米、大正三年より産麥検査を實施し大にその聲價を高め延いて産額の増加を示すに到つた。

蠶糸業 縣は蠶業取締所、原蠶種製造所を設け、民間亦全業組合等を設け、相應じて斯業の進歩を圖り、近時その産額著しく増加し、農業的に属するものは

繭	一一、三七七、三四九	蠶種	六六二、一六九
合計	一二、〇三九、五一八		

工業的に属するものは、

生糸	七、〇五六、五五五	屑及繭具綿	一三八、八四六
合計	七、一九五、四〇一		

の数を示すに至つた。

畜産業 縣の事業として種畜場を設けて獎勵の結果、牛は六千九百五十頭、馬は五万四千二百六十六頭を數ふるに至り、その質も亦改良された。そして馬は主に久慈、多賀、稻敷等に産する。その他豚羊鶏等の飼養も盛んである。

林業 縣の事業として苗圃を設けて種苗を配付し、摸範林及摸範竹林を設け、その他造林、造炭等の指導をなしつつあり。その産額も亦年々増加して來て、森林伐採の總額七百廿万圓を出づるに至つた。

又林野の副産物である石材は輓近西茨城及眞壁地方より花崗石の産出多く、殊に筑波鐵道の開通によつて眞壁地方の花崗石産額は急に増すこととなつた。その額は九十万圓に達せんとしてゐる。尙久慈多賀二郡よりは大理石三万八百六十二圓、斑石一万三千圓を出す。

鑛業 縣の鑛業は殆ど多賀郡に集中し、金銀銅は日立鑛山より産し、石炭は全郡の數炭坑より産出される。その他は東茨城、那珂、久慈等の諸郡に少許の金銅鑛あるに過ぎず。その産額を表示すると、

銅	四、三三四、〇二九 <sup>円</sup>	銀	一、一三八、五三五 <sup>円</sup>
石炭	四、一四七、八七八	金	二、二二五、二九五
水産業	太平洋岸の延長四十余里、霞浦北浦利根川等の湖川等の關係より漁場		

の區域は甚だ廣い。随つて水産物の收利も亦少くない。その主要なものをあげると。

鱈	五二六、九一七 <sup>四</sup>	鯉	一、一六九、一四〇 <sup>四</sup>
秋刀魚	一、三三二、六八〇	鱈	二六八、五一三
公魚	二四九、九〇三	鰻	二〇七、三七三
白魚	一〇五、四一二	鰻	八九、七七七
鮭	五七、一九二	鯉	一三三、二一九
となり更に水産製造物の産額を見ると、		乾公魚	一七五、〇三三
鯉節	六一八、〇三〇	乾鱈	四五、六七八
白魚	一二七、〇七〇		

乾秋刀魚 一七五、八四六

となる。本縣の斯業改良施設は霞浦、北浦の蕃殖計畫に係る大正二年以降十年間の繼續事業及漁船改良漁業講習等である。殊に公魚は有名で、近年各地に向つてその幼魚を分譲しつゝあり。

製造工業 一ヶ年の産額三十万圓以上の主なるものを擧げると、

酒類	六、七四二、八九一 <sup>四</sup>	醬油	五、九九三、七八八 <sup>四</sup>
麥粉	三、〇一九、一七八	絹織物	二、八三〇、一四一
綿織物	一、二八三、九五五	和紙	一、二〇六、〇四三
瓦	七四七、八三二	粉菘蕪	二九三、七七五

大正十一年結城町に工業試験場を設けて斯道の發達に資することゝなつた。

●商業 一般生産業の發達と共に商業も亦進歩の狀況にあり。その重要機關たる銀行は總數四十五、資本金二千二百五十七万二千九百圓あり。又公益を目的とする團體に水戸商業會議所がある。

旌 表

本縣人で旌表をうけた者の數は次のやうである。

- 1、紅綬褒章を賜はつた者 三名
- 2、綠綬褒章を賜はつた者 二名
- 3、藍綬褒章を賜はつた者 十五名
- 4、紺綬褒章を賜はつた者 一名

5、特別の賞杯を賜はつた者 一六三名

感 化 救 濟

●慈惠救濟資金 ●賑恤資金、罹災救助基金を蓄積して救濟事業の資としてゐる。  
 感化事業として薫風院があつて、感化を要する者三十六人を收容教化してゐる。  
 出獄保護事業は二十七の保護會があつて、それ／＼保護の任に當つてゐる。  
 恩賜財團濟生會施療患者は大正十年度内には三百四十五人を數へる。

財 政

縣の歲出入の大体は次の様である、

◇歳出の部 (大正十一年度決算)

三〇

警察費	八四一、八五〇	警察廳舎修繕費	九、八八五
土木費	五二六、二三三	縣會議諸費	四〇、〇二五
衛生及病院費	八〇、五七五	教育費	八一四、三三一
郡廳舎修繕費	三、二一一	郡役所費	二二二、七七四
教育費	八八六	諸達書及揭示諸費	二二三、七三二
勸業費	六三八、六七六	縣稅取扱費	一一六、〇四七
縣廳舎修繕費	三、九二九	衆議院議員選舉費	三八四
縣會議員選舉費	五二二	縣吏員費	一六九、四三一
統計費	八、二八二	神社費	一、八九〇

公園費

七、九九六

社會事業費

一七、四二二

社司社掌試驗費

六〇

臨時歳出全部 二、七五五、三四八

計

六、二五三、七八八

◇歳入の部

地租割	二、〇三一、二四四	營業稅	二六六、一八〇
雜種稅	一、〇五〇、八七六	營業稅附加稅	二二三、九五六
所得稅附加稅	五九、三二一	礦業稅附加稅	五、四二三
賣藥營業稅附加稅	七二	砂礦區稅附加稅	六
戶數割	一、〇一六、三一五	財產收入	七、一五八
國庫下渡金	一四一、二四二	雜收入	六八七、九九〇

三一

臨時部收入  
全部

一、二七五、三四九

計

六、六六五、一三三三

三三

# 水戸市

沿革

水戸は上古常石の郷に属し、水門といつたが、應永年間大掾氏此に居城した頃から水戸の字に改まり、戸数人口も増し、佐竹氏時代となつては市街の形をなすに至り、其後徳川家康の十一子頼房此に封せられ三十六萬石の城下となつてから、市街は城を中心にして東西に發達するに至つたが、明治維新廢藩置縣に當り、水戸縣を置かれ、明治四年茨城縣となり、廳の所在地となつた、爾來茨

三三

城郡及び東茨城郡に属したが、曩に市制を施行するに當り、上市、下市、常磐細谷、吉田、濱田の六大字を以て獨立の一市をなしたものである、其後諸官衙學校の設置、鐵道の開通、歩兵第二聯隊の新移其他一般文化の發展に伴ひ、市街漸次向上して、今や戸數八千七百餘、人口男二萬一千七百餘、女二萬二千餘、計四萬三千九百餘を算するに至つた。

#### 地 勢

北は那珂川を以て那珂郡に境し、他三面は東茨城郡に包まる、東の低地にあるを下市とし、西の高地にあるを上市とす、東西一里十二町、南北十五町四十間、總面積三六方里周圍四里二十七町、西端は常磐の大村と市街相接續し、一大都

會をなして居る、東京日本橋へ二十九里二十九町、大洗へ三里二十五町、太田へ五里。

#### 教 育

就學義務既達者百人中の就學歩合は九九、六二、尋常小學校は下市に一校、上市に二校、外に尋常高等小學校一校あり、これに男女兩師範附屬小學校もある。商業補習學校四、幼稚園五、産婆學校二あり。市内に在る縣立學校は師範學校、盲啞學校、女子師範學校、水戸高等學校、水戸商業學校、水戸中學校で他は市附近の東茨城郡内にある、此他私立大成女學校、好文女學校、森田女學校、常磐女學校、水戸學院等あり、近く夜間中學校も設立の機運にある。

### 交通

水戸停車場は常磐線の大驛で、且つ太田線の起點でもあるから、常に乗客と貨物で雜鬧し大正十年度の乗車人員六十五萬六千三百三十五人、降車人員七十一萬二千五百八十二人、驛前には自働車發着所あり、大洗方面行、石岡方面行、石塚方面行、太田方面行、大宮方面行等の外、市内タクシーは三十分間毎に上市柵町、東茨城郡役所前（水濱電車起點）より上市を東西に貫いて歩兵第二聯隊營舎の前まで往復して居る。水濱電車は上市の東端郡役所前から下市目貫の街を通つて三十分間毎に磯濱町との發着をなして居る。

### 産業

工業不振の地といはれて居るから、従つて未だ派手な街とはなり得ない、唯だ專賣局が設けられて煙草製造は盛んである、民間では下市にある製菓會社、日清精粉會社、上市の硝子製造會社、製瓦會社、提灯製造會社、製材工場などがある。水戸土産の茨城納豆、梅羊羹、星の梅、茨城殿中も味ふべく、水戸金彫や和雲塗、梅筆、大理石器具、階樂焼、さては烈公東湖の摺物に水戸産物の精神的本領を味はば更に妙である。

### 水戸學



水戸學は日本國民としての道德を實行する學問であつて、其主要な點は、皇孫瓊々杵尊に賜へし神勅をかしこみ、上に萬世一系の聖天子を戴き、無窮に發展すべく人としての道を行ふといふに歸着する。

源義公此の意義を明にせんとして、先づ大日本史を編纂し、以て國民道德上着眼すべき第一義を具体化したのである、其後藤田一正（幽谷）に依つて大義名分は漸く明かにせられ、會澤正志（伯民）『新論』を著はすに至つて一層其淵源は明確となり、方針は有力となつた、烈公亦弘道館を創設し、大に文武振興を策するや、弘道館記を作つて教育の目的を道破し、漫に外國の學說を拆けず、採長補短主義を執り、忠孝無二、文武不岐、學問の實用を標榜して、殆んど完璧の觀がある。水戸學は乃ち爰に愈其主義方針を確立したものであつた。

## 二學派の由來

水藩學派の分裂は、史館の總裁立原翠軒が大日本史を完成せんとして、本紀と列傳を上梓しやうとした時、門人の藤田幽谷異議を唱ひ、完全なる史には之に加ふるに志と評とを以てする必要があるとし、上梓の延期を主張した爲め、兩者の間扞格を生じ自然に學黨の形を造り、恰も陰然新舊兩派の對立せる如き大勢を來した。

## 天狗諸生の爭

此新舊の暗流は嘉永以後外交問題の勃發以來、直ちに其儘勤王佐幕の對立に進

んだのである、かくて天狗派には藤田東湖、戸田忠敬、武田耕雲齋、茅根伊豫之介、豊田、會澤の如き比較的新進の者が多く、諸生派には、鈴木石見守、結城寅壽、石川三左工門、朝比奈彌太郎、佐藤圖書の如き藩の大臣巨族が多かつた。

#### 元治甲子の役

藩内は此二派争鬪の爲寧日なく、而して大勢は諸生派の制する所となつた、藩主順公即ち支藩松平大炊頭（宍戸侯）を鎮撫使（目代）として水戸に下向せしめたが、途中より筑波暴徒の類が之れに加つて居るといふので、城代家老鈴木石見守等は、鎮撫使（目代）の入城を拒んだ、其處で少し彈丸の交換があつたが、一行は迂回して神勢館（細谷）に入り、佐竹城の方から入城しやうとした

が、撃退されて湊に入つた所城兵の追撃があり、湊の戦となつたが、城兵敗れて幕府に援軍を乞ひ、幕府即ち近傍二十一藩の大兵を發して松平軍を征討すべく進發した、松平軍は大に憤慨したが幕府を敵として戦ふは、使命にあらずとし多くは幕府に自首し、大炊頭は自盡を命せられた、然し武田、藤田等筑波の徒及ひ之と志を同うするものは脱出して京都に入り、事を圖らうとしたが、途中刀折れ矢盡きて敦賀松原の露と消えた。

#### 弘道館の戦

櫻田の變後幕府の威力地に落ち、維新の曙光漸く熾んなるや、水戸藩に一時勢力を逞うした諸生黨は急に失却して、會津に走り、官軍に抗して居たが、白河

城若松城共に陥るや、又脱出して故郷に歸り水戸城を枕に潔く討死せんと、五百人ばかり一團となつて、行々各地の衛兵を破り、疾風の如く水戸に入り、獅子奮迅の勢を以て弘道館を攻略し、之に據つて本城を抜かんとしたが、城兵三面より猛撃を加へて遂に之を殲した、實に明治元年十月一日の事である。

#### 水戸藩の人物

水戸古今の人物、之を列舉し盡すは容易の業でなくも、其内殊に有名の者を數ふれば左の如くならんか、

#### 勤王家及志士

徳川光國はいはずもがな、烈公、藤田東湖、戸田忠敬、安嶋帶刀、鶴飼吉左工

門、武田耕雲齋、田丸稻之工門、茅根伊豫之介、大場一眞齋、吉成又工門、高橋多一郎、金子孫二郎、藤田小四郎、關鍊之介、外櫻田烈士及筑波義徒等多數を算するが

#### 學者

としては、古くは朱舜水、安積澹泊、佐々宗淳、三宅觀瀾、吉弘元常其他大日本史編纂に關係した當時の學者、後には立原翠軒、藤田幽谷、小宮山昌秀、安藤爲實、川口長孺、高橋廣備、會澤伯民、青山延干、青山延光、吉田令世、豊田天功、内藤耻史、栗田寛、久米幹文等あり、現代では法學博士鹽澤昌貞氏の如き早稻田大學の學長や、また曾て第二高等學校長をした、菊池謙二郎氏の如き有名の學者もある。

## 軍人

では陸軍中將小泉正保、現代にては陸軍大將菊池愼之介氏が出て居る、菊池氏は水藩の勤王家戸田氏の族である。

## 文藝家

徳川時代はさて置き、明治以後朝比奈知泉、石河幹明、渡邊治、渡邊縁江、菊池幽芳、川崎紫山、伊藤正徳、久木獨石馬氏の如き人がある。

## 美術家

日本畫では過去に立原杏所、立原春沙、萩谷遷喬、林長羽、松平雪山、及雪江、武石鷗崖父子、現代では關田華堂氏第一回の茨展で縣の選賞一等を得て居る外全國斯界の最大權威たる横山大觀氏が出て居る、氏は本名秀麿、明治元年

八月の生れで、初め美術院に日本畫を學び、二十九年京都美術學校の教授となり、翌年東京美術學校教授に轉じ、三十一年五浦に日本美術院を創立して其幹事となる。後印度及び歐米に遊び四十三年支那に遊び、文展最初よりの審査員であつたが、今は専ら大日本美術院を主宰して居る、洋畫では中村彝氏世界的畫家として名高く、帝展審査員となつて居る、鈴木良藏氏帝展に入選したる外新進菊池五郎氏の如きがある。

金彫家としては矢田部通壽、大山赤城軒、玉川承壽、平野友善（一機軒）萩谷勝平、近代では海野勝珉、海野美盛、北川北仙、現代では小泉勝親氏、川上勝俊氏などを數ふべく、水戸金彫には一種の雄渾ありて一時江戸を席捲したる時代がある。又塗物卷繪には和雲塗の發明者町田和雲がある。

武術家

藩時代槍術には里見四郎左工門あり、劍道には和田平助、金子健四郎（千葉周作門下四天王の一人）、海保帆平、渡邊治右工門、小川留之介（無念流）小澤寅吉（一刀流）、明治以後に小澤一郎、小澤敏行、田中厚、現代では内藤高治氏、門名正氏等の名劍士を出せり。

力士

力士としては。先代常陸山寅吉下市出身にて前頭筆頭に進み。後ち二代常陸山現はれて古今無雙の名力士となつた、此常陸山谷右工門は水藩士市毛高成の次男で、明治七年一月の生れ、初め御西山と稱し、後ち常陸山と改む、三十四年大關となり、三十七年一月横綱となる、二回洋行し、大正三年退て取締役となり

しが、大正十一年病死した。

案内順序

縣廳を中心として、全市を便宜上東部西部に分け、先つ東部を停車場から市役所前へ上り、舊城内の建物より順次下市の全体に及び柵町から上市へ引返し南方を常磐公園に進み、馬口勞町方面から金町田見小路を経て案内を終らうとする。

東部方面

●●●●●●  
水戸停車場 前には大廣場があり、突當つて左すれば上市方面、右折すれば下市方面へ行ける、其左折してから、間もなく又右折すると市役所（大正七年建築、工費三万六千圓）の正面へ出る、其右手を行くと小學校（併置校）の正門につき當る、其處を左

に折れ堀に添ふて行くと、堀の盡くる所高い堤上にあるのが有名な、

### 大 鐘

で、もと縣社東照宮にあり、義公時代の鑄造に係り、朱舜水の銘が彫つてある、由來梵鐘として東照宮にあつたものを、烈公時代神佛混淆を厭ふ結果、現在の地に移して時の鐘となすに至つた、この鐘に就ては色々の傳説もあるが省略して其直ぐ下に新築されたのが水戸商業會議所、北に隣つて赤十字社水戸支部、其次ぎは大きな空濠となる、これは舊水戸城の三の丸の堀で堀の東には今、

### 茨 城 縣 廳

がある、明治十三年の建築であり、今日では種々の不便を感じ居るといふ、しかし後から次ぎ足した建物や、又縣會議事堂、赤十字社支部、米穀検査所、蠶

業取締所など皆極めて手近にあり、廊下を以てこれに接続するから、五歩に一樓、十歩に一閣の觀があつて面白くは出来て居る、正面玄關を入つて四方に廊下を繞らした内庭の樹木も古雅の稱がある、さて縣會議事堂の北隣には、

### 物 産 陳 列 館

がある、(北三の丸の角)大正四年の建築で、階上は公會堂になつて居、食堂もある、階下は縣の物産を陳列し即賣す、水産、織物、陶器、漆器、彫刻、石器酒、醬油、木製家器、紙類、下駄、大抵の品はあり、其北にある赤練瓦の一郭は水戸刑務所で、此陳列館の裏門を東に出れば、

### 水 戸 公 園

である、或は第二公園ともいふ、舊弘道館の構内で、老梅幾百本となく園内に

満ち、花時最も美觀を呈す。天保の當時一萬餘株を植わたものが、明治元年の兵燹其他で今は大半を失つた。

鹿神社 は園の南方にあり、今縣社である、天保九年藩主烈公の創建に係り公親ら長二尺餘の太刀を鍛えて奉納し、且つ其鞘に題して、

大神の猛くさかしき心もて蝦夷が千島も切り開かなんと書いた。該社創立の理由は弘道館記にある。

孔子廟 孔子の木主を安置し、建築は支那の大成殿を摸し、四面に墻を設け、正面に戟門を建つ、此廟を建つる理由は弘道館記にある、當時は春秋二季に釋奠を行つたと。

八卦堂 銅瓦の八角堂で、弘道館記碑を其中に藏す、周圍六丈四尺、高二丈七

尺、壁板の外面に各其方位に相當せる八卦を刻するので八卦堂と名づく。

弘道館記碑 八卦堂の中にある、石は領内久慈郡眞弓山より採掘したもので、高一丈五尺餘、幅六尺三寸強、厚さ一尺八寸強、臺石之に叶ひ、全部大理石（寒水石ともいふ）を以て造る、記は烈公の撰並に書であるが、原稿は之を藩の學者に諮り、忌憚なき批評添削の結果に成つた萬世不朽の名文である、明治廿三年十月廿八日、昭憲皇太后水戸行啓の折、これを御覽せられ、此の一篇が志氣振興の原動力となつて天下を風靡するに至りしを深く感歎遊ばされたといふことである。

種梅碑 此園に梅樹を植立てた時の記念碑ともいふべきもので、烈公其歌を手書して之を刻せしむ。

文好む木の下蔭にやすらひて共に語らん武夫の道

●●●●●

●●●●● 孔子廟と相對し、小舎を築いて鐘を懸く、館の生徒に東天光を報し、

且つ非常警報に用ゐしもので、鐘は徑一尺三寸、裏面には烈公其歌を親書して、

物まなぶ人の爲にどさやかにも曉つくる鐘の聲かな

としてある。

●●●●●

●●●●● 南殿の櫻 弘道館正面大玄關の左側にあつた櫻は、紫宸殿左近の櫻の分身であ

る、こは烈公夫人貞芳院（有栖川宮登美子女王）が水戸婚嫁の際、天子より戴

いて齋らし、小石川後樂園に栽ゑられたのを、弘道館建つに及んで此に移植し

たものであるが、今は枯死して株のみ残つて居る。

弘道館

水戸公園の中にあるが、館として今存し居るものは、其一部に過ぎないので、

他は皆明治元年の兵燹に罹つて烏有に歸した、弘道館は藩主烈公が、文武の教

育を藩臣に普及徹底せしむる爲めに設けたもので、其主義は水戸學の實現にあ

るはいふ迄もない、弘道館のことを詳しく研究するには名越時孝著『弘道館』

がある。館は天保九年の創設で、今の玄關の左を正廳とし、其右には大番直所、

番頭物頭直所あり、全敷地方四町、東は府城に接し、構造は素朴堅牢を主とし、

正廳の東に文館を、南に武館を置き、あらゆる學科と實習とを修め、毎歲文武

の優劣を試験し、一藩の士氣爲に大に振ひ、列藩其風を倣つたが、今は焼失じ

て本館一棟と正門とを残すのみ、正門の門扉には今猶兵火當時の彈痕を留めて

居る、構内の大部分は現今水戸公園となり、又は武德會の演武場一棟を建て、



一方に水戸市尋常高等小學校を建設してある、弘道館記を左に、

弘道館記

弘道者何。人能弘道也。道者何。天地之大經。而生民不可須臾離者也。弘道之館。何爲而設也。恭惟。上古神聖立極垂統。天地位焉。萬物育焉。其所以照臨六合統御宇內者。未嘗不由斯道也。寶祚以之無窮。國體以之尊嚴。蒼生以之安寧。蠻夷戎狄以之率服。而聖子神孫。尙不肯自足樂取於人以爲善。乃若西土唐虞三代之治教資以贊皇猷於是斯道愈大愈明。而無復尙焉。中世以降。異端邪說。誣民惑世。俗儒曲學。舍此從彼。皇化陵夷。禍亂相踵。大道之不明於世也蓋亦久矣。我東照宮撥亂反正。尊王攘夷。允武允文。以開太平之基。吾祖威公實受封於東土。夙慕日本武尊之爲人。尊神道繕武備。義公繼述。嘗發感於夷齊。更崇儒教明倫正名以藩屏於國家爾來

百數十年。世々承遺緒沐浴恩澤以至今日則苟爲臣子者。豈可弗思所以推弘斯道發揚先德乎。此則館之所以爲設也。柳々夫祀建御雷神者何。以其亮天功於草昧留威靈於茲土欲原其始報其本使民知斯道之所繇來也。其營孔子廟者何。以唐虛三代之道折衷於此欲欽其德資其教使人知斯道之所以益々大且明不偶然也嗚呼我國中土民夙夜匪懈。出入斯館奉神洲之道資西土之教忠孝无二。文武不岐。學問事業不殊其効敬神崇儒。無有偏黨。集衆思宣群力以報國家無窮之恩則豈徒祖宗之志弗墜。神皇在天之靈亦將降鑒焉。設斯館以統其治教者誰權中納言從三位源朝臣齊昭也。

天保九年歲次戊戌春二月

齊昭撰文並書及篆額

弘道館の正門を出ると、空濠に追手橋が架してある、橋を渡るに舊水戸城の西

二の丸であるが、茲で少し水戸城のことを概括して置きたい。

水戸城址

水戸市の中央にあつて、始め馬場城と稱し東西に長く、南北に短い、老松古杉鬱然天を磨し、北には那珂川流れ、南は仙湖を控え、地盤は岡阜に屬し、東端深淵を隔て下市を俯瞰し、西は數條の空濠を以て支え、實に天然の金城湯池あつた、郭内を三分して本丸、東二の丸、西二の丸といふ、後には三の丸も出來た。

**本丸** は中央で、東西百八十間、南北六十三間、今縣立中學校のある所で、古大塚氏の築く所と傳ひ、江戸氏時代までは此郭のみであつたらしい。  
**東二の丸** 本丸の東にあつて、地勢本丸よりは八間低い、東西百十八間、南北

六十三間、今中學校の運動場になつて居る。

**淨光寺郭** 東二の丸の東に一小郭がある、これ淨光寺郭といひ、佐竹氏時代に正門の在つた所である。始め江戸氏の築いたのを、文録中佐竹氏が更に増改築をしたものと傳ふ、水戸城の最東端である淨光寺の名は江戸氏時代より此に向宗の淨光寺があつたのを文録中他に移して城を築いたに依るといふ。

**西二の丸** 本丸の西にあり、東西百九十間。南北百六十間、明應年壬江戸氏之を築き、宿城と呼び、又天守郭とも稱したが、文祿に至り佐竹氏之を修築して中城と稱した、其後徳川氏の領に移り、代々の藩主此に居住したが、維新となり、明治四年十一月火あり、天主閣のみを残して、厩屋樓櫓凡て烏有に歸し、今は郭内に師範學校、縣立圖書館、教育參考館などが建設されてある。

三の丸 は外郭ともいふべきもので、西二の丸の西に空濠を隔て、あるのがそれである。これは比較的新しく出来た方で、東西二百間、南北百三十餘間、藩の大臣巨族の邸宅は多く此郭内にあつた、今弘道館や、縣廳などのある所が、此郭である。

外濠 は今上市田見小路の西端に其跡を留めて居る地の基點から、南は幸町の空濠跡に達する一線と、今一つは更に西に進み、八幡町八幡宮裏手から、水戸の高臺を南地に開鑿して神崎に至るの塹濠である。これは最も新しく徳川時代の開鑿であるが、今は大部分埋めて市街となつた。

按ずるに、水戸城は佐竹氏時代迄は、東方に重きを置き、淨光寺門を正門として、本丸を固めて居たらしいが、徳川氏になつてからは、それでは規模の小さ

いのと、西方の弱點（江戸氏が河和田から容易く水戸城を陥れた例もある）に鑑み、西二の丸に本郭を置いて此に移り、正門（追手）を西に新設し、更に二大塹濠を西方に開鑿して一大城郭を形成したものである。

水戸城沿革 往昔大掾氏の族石川資幹此の地頭たりしが、城を築いて馬場城と稱した、資幹は馬場次郎である。文治四年次郎府中（今の石岡）に移り弟山本武幹此に居る、九世の裔滿幹に至り、佐竹江戸兩氏勢強大となるや、應永七年滿幹水戸城を修理して之に備へしも、河和田城主江戸通房の爲に襲はれて城陥る、以後江戸氏代々此に居り、天正十八年重通、（通房の八世）に至つて佐竹義宜の爲に亡され、義宣本城に移つたが、關ヶ原の役歎を西軍に通したので、慶長七年五月出羽秋田に移され、武田信吉此に封せられたが、翌八年病死された

ので、徳川頼宣封せられ、更に同十四年家康の十一子頼房を此に封して三十五萬石を與へ、累葉居城したるも、明治維新となり藩籍を奉還するに至つた、水戸徳川家の累代は頼房（威公）光國（義公）綱條（肅公）宗堯（成公）宗幹（良公）治保（文公）治紀（武公）齋修（哀公）齋昭（烈公）慶篤（順公）昭武（節公）篤敬（定公）國順（現代）である。

#### 明治天皇行在所記念

水戸城に關しての大略を説いたから、再び順を追つて弘道館前の追手橋から説き初める。

追手橋を渡ると、師範學校の入口に槍の穂尖型の銅碑が建つて居る。こゝは明治二十三年十月 明治天皇茨城縣師範學校を行在所として機動演習を樹はせ給ふ

たを永久に記念せん爲め、大正十年に建てたものである。

#### 師範學校

師範學校は初め上市鐵砲町北端にあつたのを、明治二十年水戸城二の丸へ新築して此へ移つたのであつて、校内に明治天皇行在所室あり、本科一部、本科二部、講習科、附屬小學校と科別してある。

#### 縣立圖書館

師範學校の北、老樹林の間にあり、昔し彰考館のあつた所で、其裏手は眺望に富む、圖書二萬九千餘部、冊數七萬八千五百餘、經常費一萬一千二百四十四圓創立は明治三十六年二月、明治四十年巡回文庫制を設け、大正十年より海岸夏季文庫を開設などして利用し居る。

参考館。茨城電力會社

教育參考館は圖書館に隣接してある。大正四年十一月即位の大禮を記念せん爲め、教育的に建築したもので、大正六年十一月十日大禮御舉行の記念日に開館式を擧げた、北方の崖の下には茨城電力株式會社があるけれど、先づ中學校に向ふ。

中學校及銅像

師範學校北側の道路を東に進むと、縣立水戸中學校の正門に入る、其處は水戸城の舊本丸で、四方を見おろし形勝の地である、東南角の高地にある銅像は、此校出身者で、本邦に於ける飛行機最初（京阪飛行墜落慘死）の犠牲者たる故武石浩坡である、中學校を東に抜けると、一段低い地盤がある、これ舊水戸城

の東二の丸で、今中學校の運動場になつて居る、其又東に小さな郭地こそ淨光寺郭で、佐竹氏の築いた追手の門がこゝにあつたものだ、此處はもう水戸城の東に盡くる所で、此岡阜を下れば下市の市街が展開する。

明星池

城の高地を東西に下れば明星池がある、今は市街發展の爲に大半埋められたが、往年江戸通房水戸城を襲ふ時、明星の示現あつて勝利を得たといひ、屢々此邊に來て大白星を拜し、爲に明星池と名づくこと、

赤十字病院、那珂川

明星池から北、舊城に接続して、昨年建築せられたのが赤十字病院で、附近に市の避病院もある、更に北して那珂川に沿ひ西に向ふと、千波湖干拓に依つて

生ずる、灌漑水用の減するを補ふ爲め、那珂川から水を引く揚水機装置所がある。又河岸よりは水戸停車場へ便利であるから、此邊材木の集散及び製材工場も盛んである、杉山河岸から海濱通ひの汽船もあつたが、今は休んで居る。

#### 水府流水泳場

は此處にあり、急流を逆り、又は横切ること、急進行とに於て古來天下無雙と稱せられ、其横身になりて、體を伸縮しつゝ、水を蹴り行くさま實に快速力を極むるもので、此流儀今も衰へず年々夏季に稽古場を開き、組織的に教授して居る、引返して下市三の町に。

#### ○水戸金彫工場

を見る、水戸の金彫は刀劍の飾具に於て古來天下に名高くあつたが、維新後一

且衰微して、後ち一般美術の進歩と共に再び勃興して來た、今水戸にあつて斯業に従事する者は下市三の町北川北仙(二代)の工場を最とし、固有の手彫を以て其特長を傳へ、花瓶、置物等を造つて居るが、産出の個數は甚だ尠いのを遺憾とする、此外に上市楓小路鈴木虎仙もあり新研究を加へて居る。

#### 煙草專賣局水戸製造所

は、市中第一の建築物で、地域一万坪、工費總額四拾萬圓を要し、大正二年の創建である、其他下市の名所としては、東北端の

#### 壽橋

を見てもよい、これは那珂川へ架してある長橋で幅三間長九十五間、工費六萬圓を要した關東有數の橋である、此附近には舊藩時代砲術稽古をした神勢館の

址や、錢屋稻荷の盆踊、首無辨天、瓦谷不動、武熊古城址などがあるけれど、道を急いで行かねばならないのが、

吉田神社、薬王院

である、南方千波湖岸に高く森殿の杜をなして居るのが吉田神社で、社殿の構造は宏壯に、境内の眺望は絶佳である、もつと南へ進めば有名な薬王院もあるが、いつれも東茨城郡の所に述べてある、引返して上市へ向ふべく轟町を通ると

轟橋 大堰

が左に見ゆる、これ慶安年間千波湖の水を那珂川に落さん爲めこの堰を設けたので、堅牢無比の稱あつたが、今は千波湖干拓の爲め改築された、轟橋を渡れば上市柵町で、右には東茨城郡役所あり、左に、

電車 起 點

がある、水戸より磯濱間の水蒸気電車は此處から三十分毎に發車、着車する、近き將來には更に水戸停車場に通じ、第二聯隊の前まで通することになつて居る、往來繁き柵町を西に向つて進むと、右手に市職業紹介所がある、

義公誕生地、胞衣塚

は水戸停車場構内の東方太田線發着所附近にある、義公は元と水戸家の重臣三木氏の邸内に生れ（寛永五年六月十日）たので、胞衣塚も附近にあつたが今は西山の舊館に移され、其址には杉を植ゑられてある、更に西に進んで银杏坂を登る途上、左手に東照宮の華表を見る、これ

縣社 東照宮

で其創建は元和七年の春、家康を祀る爲め藩主徳川頼房の勸請に係る、當年の遷座式を行ふや、天皇の奉幣使大納言三條公廣、宣命使參議西園寺實晴、大僧正天海等之に臨み祭儀莊嚴を極めた、社殿の構造は日光東照宮を摸し、金碧燦爛たるもので、現に縣社に列し、特別保護建造物になつて居る、社寶則包の刀一口は後陽成天皇から豊臣秀吉に賜へるもので、明治四十四年國寶に指定された正面（南方）の石階を降つて右に向へば奈良屋町となる、此邊には

瓦斯會社、製氷會社

びどがあり、字梅香に上れば、栗里八景（舊彰考館總裁安藤氏の邸）や、碧於亭（安積澹泊の邸）の址などがあるけれど、黒羽根町へ廻れば、

常磐病院、電話交換分局

がある、此病院は規模大きく、外觀もよい、此町には『先春梅』の名木もあつたが、今は枯死した、北に進んで本町通りは南町へ出た、右へ曲り東に少し進むと、茨城日報社（日刊）がある。

郵便局、常総新聞社

なども此先きにはあるが、引返して西へ進むと、

常磐銀行、いはらき新聞社

と相並んで新建築が町の美觀を添へて居る、此新聞は販路も擴く日々數萬枚を刷り出すと、更に西へ進めば、

五十銀行、川崎銀行

など目立つた建築や、泉館、美都里館、階樂館などの活動劇場がある。向井町



廣小路から左(南)に折れると、

七〇

神應寺

がある、神應寺は藤澤山と號す、藤澤遊行上人第十一世普光上人の開基で、もと藤澤小路にあつたのを延寶八年義公此地に移す、背後の墓地には、

和田平介、山國兵部

の墓がある、平介は居合新田宮流の開祖で、義公に仕へ三百石を食んだが、罪あつて天和三年九月自刃し、此に葬る、兵部は喜八郎と稱し、水藩の勤王家で軍學に精しかつた人、後ち正四位を贈らる、藤澤山の左側、

別雷皇太神

は元と普光上人が鎌倉より來つて神應寺を創立する時、曾て雷神の感應により、

傍に一社を建て雷神を祀つたものである、其後參詣人頗る多く、縁日の雜鬧は界限無比であつたが、今は昔日程でない、社前を一直線に南へ近むと左側に、

神崎寺

がある、笠原山淨名院と號し、眞言宗の名刹で、仁和寺の直末である、天和年中の創立に係り、本尊は十一面觀音で、眺望形勝の地にあり、此附近千波湖岸から、

神崎岩

を産す、明和年間から伐り出したもので、脆質ながら火には軟くも水には強く、多く井筒に用ゐらる、五本松の松琴亭は其東方阜上にあり、湖畔の大路を西に進めば、大華表を見るべく、これ、

別格官幣常磐神社

七一

一の鳥居である、廣い石階を昇れば、神社の正面となる、明治五年の創建で、藩主義公並に烈公の靈を合祀す、毎歲五月十二日祭典を行ふ、社寶の、

陣 太鼓

は直徑四尺七寸五分、胴周一丈五尺五寸、長さ六尺二寸、こは烈公が武を演じた時用ゐたもので、公自筆の銘に『震天動地、起雲發風、三軍踊躍、進思盡忠』と彫りつけてある、

太極砲

社側に、烈公の鑄造せられた大砲『太極』及其砲丸を置き、社後の寶庫には種々の寶物多し、

鎮靈社

社前西側にあり、水戸藩士の維新以來官軍に属して戦歿したものの、靈を祀るもので明治十二年の造營である。

彰考館文庫

常磐神社の東隣にあり、大日本史編纂の史料を保管し置く所で、明曆三年義公始めて史局を江戸藩邸に置き之れより明治卅九年十二月迄二百五年間を経て、全く之を完結し、全部二百三十一卷水戸家から之を朝廷に獻した所、金一萬圓の下賜あり、水戸家では之に恐懼し本文庫を建設し、史料を永遠に保存し、以て聖慮の忝きに副へ奉らんことを期したものである、藏書七萬餘冊、大日本史原稿、獨逸兵書の寫本等重要のもの多し、

常磐公園

上市の西南端に位し、面積三萬五千坪、天保十一年藩主烈公此地を遊息所と定められ、同十二年五月中旬工事に着手し、翌十三年七月に至り好文亭、樂壽樓及階樂園まで經營全くなつた、畑地には梅數千株、芝生には萩、躑躅を植え、園中に一大碑を建て、設苑の理由を明にしてある、千波湖に枕み、筑波を眺むべく、老松崖に這ひ、古梅水を嘗め、珍石奇木亦備はらざるはなかつた、廢藩後も水戸家の所有であつたが、之れを官に納めて明治六年に公園となり、後ち水戸市の共有地となつたが、今は縣に移管した、

八景碑 東南の崖腹にあり、櫻湖暮雪の四大字（烈公筆）を刻す、水戸領内八勝の一である。

吐玉泉 西方の崖路を北へ進むこと一二町ばかりで、崖下に大理石の井筒あり、

清水玉の如く其中から洩れて居る。

御手植松 攝政宮殿下曾て好文亭にお成りの際御手植遊ばされたもので、亭の南内苑にあり。

御幸の松 明治二十三年十月 明治天皇、昭憲皇太后と共に水戸行幸啓遊ばされたので、光榮を記念せん爲め市で植ゑたもの、梅園と芝生の境にあり、

清香亭 は園の東南崖腹にある唯一の料理店で、殆んど公園附屬の觀をなして居る。

櫻山 白雲岡ともいふ、園の西方數町に見ゆる美しい丘陵で、櫻樹多く、丘下を小川流れて公園に接続し、公園からの眺望は園美觀の中心ともいふべき所である、東西約二百間、南北八十間、老樹多く夏季水戸市小學の林間學校に利用

されて居る、

●●●  
観梅客 梅花季節に観梅者は年々増加し來り、東京方面からは別仕立の観梅列車で來水するもの殊に多く、其都度鐵道省では公園下に假ホームを設けて便宜を與へて居る、此観梅デーの賑かさは比年隆盛を極める。

縣立水戸農學校

は公園の裏手(北)にありて、明治三十三年の創立、其前を右(東)に折れて、河和田横町に出れば左側に

信願寺

がある、眞宗西本願寺に属し、栗野山徳池院と號し、貞永元年親鸞二十四輩二十三番信願房の開基で、もと信願寺町にあつたものを、元和年間此に移したも

の、次きは久保町で、其處を北に横切れば新屋敷となり、其西端に、

縣立水戸商業學校

がある、明治二十七年の創建で、野球に適當なグラウンドを有するから、よく其對抗競技場になる、其西方に大建築の見ゆるのは、

水戸高等學校

で、こは本縣行方郡出身の富豪内田信也氏の寄附金で五年前に出來たもの、更に北に進めば、

歩兵第二聯隊

の營舎や、工兵第十四大隊の營舎もある、明治四十二年の新築で、歩兵第二十七旅團の司令部もここに置かれるが、土地は東茨城郡渡里村に屬する、其他

## 此附近の名所

は、東茨城郡案内中『水戸市附近』といふ所を参照されたい、愛宕神社、晒井桂岸寺、祇園寺も之れにある、唯だ特に案内したいのは、

## 藤田東湖墓

である、上市馬口勞町を西へ極まると桂岸寺（三夜様）の馬場前きが右手にある、之れを入つて、二十三夜堂の裏手から左の方へ分け入れば直ぐわかるが、それだけでなく二十三夜堂の前面から左（西）へ曲つて又右（北）へ進めば墓所に出る、兎に角二十三夜堂からは西北に當つて程遠からぬ、眺望のよい崖の上にある、附近には水戸藩の學者、勤王家、烈士などの墓多く、安積澹泊、藤田幽谷、豊田天功、高橋多一郎、金子孫二郎、蓮田市五郎、青山拙齋、茅根伊豫

之介、大關和七郎、黒澤忠三郎、吉成又右衛門、鮎澤伊太夫其他別に南方に一劃をなして、一大、

## 殉難碑

がある、これ水藩元治甲子役の殉難者を改葬したもので、贈従四位榊原新左衛門外一百六名及び郷村出身の志士贈従五位黒澤覺介外二百四十名の墓である、こは舊藩主徳川昭武侯其忠節を追賞して明治初年之を改葬したもので、戦場及其附近に戦死したもの、遺骸は、其遺族が各之を収めて郷地へ葬つてある、これから東に數町進んで、

## 心越禪師墓

がある、心越は義公に聘かれ祇園寺を開いた支那渡來の名僧で、其墓は上市馬

口勞町二丁目を北に入つて、祇園寺の正面から少く手前の左側にある、義公題して壽昌山開祖心越大和尚塔といふ、祇園寺西方の墓地には水戸藩の重臣、市川、朝比奈、太田原、朝倉氏等代々の墓がある、更に東に見ゆる森は、

縣社 八幡宮

で、上市八幡町白旗山の地にあり、祭神は京都石清水八幡宮と同體で、古は久慈郡太田に在つて佐竹氏の鎮守たりしが、文錄年間佐竹義宣水戸城を領するや、これを水戸に移したるも、元錄年間之を那珂西（今石塚町大々那珂西）に移し肅公時代再び之を水戸に移して現在の地に建立す、爾來水戸家の崇敬深く、今も參詣人多し、境内老樹枝を交へ、那珂川を俯瞰し、絶勝の地である、金町を東に向つて行けば、左側に、

女子師範學校

がある、其裏手は眺望よく、附近の崖は、元と妙霞臺名櫻のあつた所で、貞芳院の歌に、

天さかるひなにはあれど櫻花雲の上までさき匂はなん

とあるは此處である、金町を通り越せば、

水戸稅務署、測候所

が左側にある、一ト坂越すと田見小路で、北方の崖の上は一帶に風色よく、朱舜水祇堂のあつた所も此邊であるが今は何も留めない、それから、

田見御殿地

も此附近にある、寶曆九年藩主良公、此處に別莊を設けて貴樂亭と名つけ、後

ち田見御殿と改め、地名を田見小路といふ、明和年間火災に罹つて亭は無い、田見小路の南側には、

縣立水戸高等女學校

及び煙草專賣局收納所がある、これで水戸市は大略一巡し終つたもので、田見小路を出離るれば出發點の縣廳の前通りへ出る、其右手にある灰色の洋式建築は

水戸地方裁判所

で、其南側から西に向ふ道は、上市の中樞をなす仲町通りで、此通りを行くと

農工銀行、茨城病院

などがあり、更に進めば左に入つて江幡病院あり、五軒町には上市小學校や、繭市場もあるが案内は限りがないから、茲で一先つ打ち切らう。

## 東茨城郡

沿革

本郡は昔那珂郡に屬して居たが、中世其地域擴張して那珂川に達し、常陸第一の大郡となつた、明治十二年西の一部を割き西茨城郡を置くこととなり、本郡は東茨城郡となる、郡役所は便宜上水戸市柵町にあり。

地勢

北一帯は那珂川を以て那珂郡と境し、西北一端は栃木縣芳賀郡に接し、東は大

平洋に面す、東南に涸沼あり、大部分鹿島郡との境をなして居る、東南は平地多く、西北は山岳地帯に屬する地が多い、総面積三十七方里、戸數二万四千餘、人口十一万七千餘、町數四、村數三十を有し本縣第一の大郡をなして居る。

首腦地

郡役所を便宜上水戸市柵町に置くので、郡内には別して行政上の首腦地はなく警察署も重に水戸警察署が所管する、郡としての事業を行ふ場合には小川、石塚、常磐、磯濱等の要地に於て之れを交替的に行ふを例とする。

教 育

水戸高等學校、縣立農學校、縣立工業學校は郡地内にあり、小學校は五十校、實業補習學校は四十二校あり、郡教育會の部會を左の如く設けてある。

東部會	會場	磯濱男子尋常高等小學校
南部會	全	堅倉 全
中部會	全	常磐 全
西部會	全	妻根 全
北部會	全	石塚 全

學齡兒童就學歩合は九九、五〇で、青年會員は四千八百餘人、處女會員二千四百八十人、圖書館は石塚町に一、下大野村に一あり。

交 通

東部には郡役所前から磯濱間の水濱電車あり、これにて平戸に至り、其處から涸沼へも、那珂川へも連絡の舟運があり、北部には水戸驛前から郡内渡里、飯



富、石塚を経て澤山村に至る乗合自動車が数回往復し、又水戸柵町から郡内長岡を経て石岡町へ至る乗合自動車もある、これは舊陸前濱街道だが、水戸より河和田村へ出て笠間へ通る縣道もある、汽車は水戸驛から常磐線の上り、赤塚、内原の二驛があつて、後又南方羽鳥驛も郡内竹原村に屬して居る、尙小川町、石岡町間の鐵道は今竣功を急いで居る、小川から汽船の便もあるはいふ迄もない、又茨城鐵道は水戸上市を起点とし石塚町を経て澤山村に至るもので近く工事に着手する筈になつて居る。

## 物産

主なるものは北部の薪炭、煙草、茶、楮、石材、西部南部の繭、麥類、東部の水産、鮑、鯉魚、青刀魚、鯛味噌、佃煮、鹽辛、白菜等である。

## 主要名地

大洗 水戸市より三里強、電車便がある。  
 廣浦米津 水戸八景の一で、涸沼の一部分である、水戸からの電車を平戸驛に下車し、モーターで涸沼川を少し逆ると直ぐ、  
 小松寺 小松村にあり、水戸の西端から三里、平重盛の墓がある所、  
 那珂川 那珂郡と本郡との境を流れて海に注ぐ、舟楫通じ、魚類を豊産し、殊に秋季鮭鮎を産す、郡内では岸に沿ふて御前山、磐船山などの勝地がある。  
 涸沼 周回七里の大湖で魚介を豊産し、沿岸に景勝の地が多い、水濱電車で連絡し得る。

御前山 澤山村にあり、水戸驛から六里、自動車の便がある、那珂川の急流に

臨み、樹木多く絶景の地なり。

案内順序

本郡を案内するには水戸市を中心としてこれを左の五方面に分けるを便とする  
一、水戸市附近 二、東部方面 三、南部方面 四、西部方面 五、北部方面  
而して水戸市に接續する土地には歴史上水戸市に關係ある重要な地點多く、従つて水戸市を説く時にも同一事項を擧ぐることがあるやうになる、

水戸市附近

先づ東方那珂川の岸から説き初まるが、上大野村の川岸にチョンポリと高い丘陵が見ゆる、これは有名な、

五町矢場 で、水戸藩時代、烈公が武を練るの手初めに築き上げた射的場の跡である、南へ進むと、

農事試験場分場 がある(大字澁井) 此處は重に蔬菜果樹の栽培研究をなす所、又南方縣道に沿ふて東する小流は、

備前堀 といひ、伊奈堀ともいふ、昔し伊奈備前守の設計で、千波湖から大貫の間三里ばかりを開鑿し、水を通して附近の水田を灌漑したものである、其又南の農事試験場 は酒門村大字酒門にあり(水戸下市から五六町) 各種農作物の研究見るべきもの多いが、就中野鼠驅除菌の飼育法及用法は一段の進歩を見る、坂戸城址 大字酒門にあり、應永中小宅高國の築くところ、

常照寺(酒門村)は元録十三年源義公の創建せる禪宗の寺で、今尙舊觀を留めて

居る、此附近には其他、安樂寺（眞宗）、蓮乘寺（日蓮宗）などの寺もあり、眞宗の善重寺には聖德太子の國寶もある。千波湖に突出した杉森は、

吉田神社で、古來常陸第三の宮（一は鹿島、二は筑波）と稱され、日本武尊を祀り、社格は縣社、延喜の制名神大社に列す、社殿の構造は莊嚴である、其西には、

縣立工業學校あり、機械科、應用化學科も設置しある、

古墳 數年前發掘した珍らしい古墳は吉田村大字吉田の地内で、穴の土壁に異様の繪を發見したが、本邦稀有のものであると、水戸市下市に接續する臺町（吉田村）には、

藥王院 あり、桓武天皇の勅願によつて草創した比叡山青蓮院の末である、舊

時は六坊、八末寺、十二門徒寺あり、頗る隆盛であつたが今はそれ程の舊觀を存しない、吉田村の西は縁ヶ岡村となる、

圓通寺 大字千波にあつて、文明十六年江戸但馬守之を建て、江戸氏累代の菩提所であつた。

縣種苗圃 大字千波、千波湖の南岸にある。

會澤伯民墓 大字千波にあり、名は安、正志と號す、天明二年五月生る、天保二年彰考館總裁、十一年弘道館總教となる、壞夷論者にて『新論』の著あり、我國体を説くこと之れに過ぎたるはなし、文久三年七月歿す、後正四位を追贈せらる。

武田耕雲齋の墓 大字見川妙雲寺にあり、伊賀守正生と稱す、筑波義徒の將帥

で後年敦賀に刑せられ、正四位を追贈さる、

櫻山 大字見川にあるが、これは水戸案内に詳しく書くことにして、さて常磐公園の後ろに、

縣立水戸農學校 あり、常磐村地内で、此校には本科、養蠶科、農業教員養成科もある。

水戸高等學校 も此村にあつて、これは本縣行方郡出身の富豪で、神戸市内田信也氏の寄附金に依つて設立されたものである。これから北へ進んで袴塚の市街へ出ると、日蓮宗の、

本行寺 がある、縣道の北側には、

歩兵第二聯隊 及び歩兵第二十七旅團司令部、工兵第十四大隊等の營舎があ

る、それから東へ廻ると、突元たる丘陵を見る、これ前方後圓の大古墳で、

那珂國造の古墳 たるや疑ひのない所、今は其頂上に、

愛宕神社 を建て、ある、これ鎮守府將軍平國香常陸大掾に任せられし際、京

都愛宕山から勸請して此處に奉祀したものであるといふ、

桂岸寺 はそれから東にある、延寶年間中山備前守の創立で、二十三夜尊は其

域内にあり、開運幸福の守護佛として、毎月二十三日遠近の參詣者雜鬧し、水

戸界隈第一の盛り場とせられてある。此寺の近手に、

名士の墳墓 がある、則ち常磐原共同墓地の中には藤田東湖父子、安積澹泊、

豊田天功、茅根伊豫之介、金子孫二郎、高橋多一郎、及び櫻田烈士大關、蓮田、

黒澤其他元治甲子殉難者等の墓が多い、詳しくは水戸の部で説く、

曝井 袴塚の北、瀧坂にある（愛宕神社の後方に當る）清泉滾々として涌き出で、曾て涸れたことなしと、常陸風土記に『泉出坂中、多流尤清、謂之曝井、縁泉所居、村落婦女、夏月會集、洗布曝乾』とあり。

三栗のなかにむかへる曝井の絶えず通はんそこに妻もが（萬葉集）

今ぞしる思ひ出つ、曝井のさらにも人は戀しかりけり（衣笠内大臣）

桂岸寺の東には近年建設された、

茨城縣蠶種製造所 があり、其東には、

祇園寺 がある、禪寺で壽昌山と號す、明國金華山永福寺の僧心越禪師源義公

の招聘によつて水戸に来るや公、天徳寺を川和田に移し、新に一寺を其跡に建て禪師を居らしむ、實に元祿五年の事である、寺寶には天下一品の關帝金印を

初め多数ある、今境内に公園を築造中なり、

心越禪師墓 元祿八年九月三十日寂し、祇園寺域に葬る、義公碑面に親書して、

壽昌山開祖心越大和尚塔といふ。

森山繁之介墓 櫻田烈士森山氏の墓は祇園寺境内の西方にあり、これで郡内の

水戸附近案内は一廻り済んだ譯である。

東 部 方 面

水濱電車を郡役所前から乗つて、六反田停留場に下車すると、

稻 荷 村

六地藏寺 の森が見ゆる、宥寛上人の開基に係る眞言宗の古い寺で、安産を祈る爲め婦人の參詣者多く、古文書、寶物も多い中に、雪舟（或は雪村ともいふ）

筆の十二幅殊に珍らしい、境内墓地には立原翠軒父子及栗田寛等の墓がある。  
稻荷神社 大字大串にあつて、寶永二年藩主肅公の創建である、以來年々水戸市に出社して祭典を行ふの慣例が今も行はれて居る、郷社なり、

下大野村

涸沼橋 涸沼川に架せる長橋で、磯濱町との境をなし、其水洋々として流れ緩に筑波山を眺むべく、絶景の地である。橋下には水濱電車の平戸停留場があり、こゝから涸沼方面、湊町方面へモーターボートで連絡し、橋を渡れば磯濱である。

名産白菜 茨城結球白菜は此村の名産で、明治三十五年頃より土地の人小川萬太郎といふ篤農家の工夫發明した栽培法により優良の白菜を産するに至つた。

磯濱町

磯濱は東海岸の町で、人口一萬餘、漁業最も盛んで、海水浴場は舊築港堤から南へ廻り大貫海岸へ續いで一帯に近來人出が多く、電車開通（昨年）後、夏季に於ける此海岸はどれ程盛んになるか分らぬといはれて居る。

大洗磯前神社 は延喜の制名神大社に列し國幣中社なり、齋衡三年の創立なり、大已貴少那彥那の二神を祀る、大洗の高い岸頭に建ち、社前の眺望最もよい、其下の海岸には奇巖怪石亂立し、怒濤之に激して頗る壯觀を呈する、

水戸を離れて東へ三里浪の花ちる大洗を謠ふべき料理店、旅館は適所に適設しあり。

子。の。日。原。 大洗から北の方無線電信所前を通つて砂原の松山道となれば左手に子の日原がある、眺望よき地點で、

萬代を松に契りて今日こそは子の日の原にひかれ來にける

といふ碑建つ、源烈公の歌並書として名高い、更に西北に進めば、

祝町。 あり、那珂川と太平洋への岬角上に位置して、其下には長い海門橋があり、渡れば湊町となる、渡らずに左の方、

願入寺。 巖船山を見る、親鸞上人の孫本願寺第二世眞如上人の開基にて、本山

と最も關係深き名寺であつたが、元治甲子の役兵燹に罹つて烏有に歸す、其附近にある名勝が、

巖船の夕照。 水戸八景の一で、烈公書の碑建つ、涸沼川と那珂川との碧潭を老

樹の間に隠見し、八景中隨一の稱がある。

原山並樹

原山並樹が何恐からう時にや三途の川も越す

といふ磯節で有名な原山は此道で、海門橋から大洗の背後を通り磯濱市街に出る一本の道路をいふ。

水産。 鮑、鯛、鯉魚、鱒粕、鯉節、鹽辛、鯛味噌等である。

大貫町

海岸。 北は大洗岬を控え、南は鹿島郡波崎迄を一望すべく、夏海村の境には風致よき松林に富み、水濱電車開通以來海水浴客多く、又遠淺で岩礁がないから、地曳網もひける。

大場村

大貫町から西南涸沼川を渡れば大場村である。  
茨城白菜採種組合 大字島にあり、大正七年郡農會の採種圃を譲り受け、面積一町四段歩、年々七石の種子を産出し、二府一道三十八縣に販賣して居る。

石崎村

平戸橋からモーターで涸沼川を逆れば涸沼に出る、其右岸は石崎村である。  
米洲岬 大字下石崎にあり、細長い白砂青松の地が湖中に突出し、宛然丹後の天の橋立に髣髴するので、烈公之れを八景の一つに見立て『廣浦秋月』の碑を建つ。

親澤の老松 大字上石崎にあり、老幹蟠屈して千年の緑を見せて居る、源光園

の歌

子を思ふ涙ひぬまの一松浪にゆられて幾代へぬらん

石崎城址 大字上石崎にあり、涸沼に突出し、東西三十間、南北二町、東方には今尙土壘があり、往昔石川幹經剃髮し禪師房と稱して此に居たと、  
水産 涸沼に沿ふので淡水産に富み、就中小魚の佃煮を産す。

南部方面

緑岡村

浴徳泉 大字笠原新田にあり、寛文年間源義公其清泉を水戸下市に引いて飲料水にせしむ、文化年中源文公碑を建て、浴徳泉といふ、  
明治四十三年水戸市水道を改築し其源泉となった。



●深●作●安●文●氏● 大字千波の人、文學博士東京帝國大學の教授として倫理道德の大家である。

長岡村

水戸から舊陸前濱街道を南に向へば、三里ばかりで長岡村がある、

石器時代

の遺物を發見する有名な土地で、最古から末期アイヌの遺物に至るまで殆んど發見せられざるなく、帝大の人類學教室にも此土地の調査は重要なものとして存してある、

ホウテウ塚 文明十三年江戸但馬守、小幡長門守と戰ふや、北條勢小幡を援ひ、却て爰に多數討死した所と傳へらる。

楠公社址 大字長岡にあり、安政六年以來水藩勤王志士が大義を唱ひ、壤夷を

謀議せし跡である。

大戸櫻 大字大戸にあり、目通り三丈三尺五寸、枝下地面を覆ふこと百八十坪關東唯一の名櫻といはれて居る。

上野合村

圓福寺國寶 大字鳥羽田にあり、嘉永年間水戸東照宮別當大照院より遷したもので大正四年國寶となりし彌陀如來の木像なり、又同境内の不動尊幅は知證大師の自筆で義公これに裏書きしありといふ。

小栗氏墳墓 同字龍合寺にあり、小栗氏は鎌倉時代より此地に住し、天正中地頭たり、南方の小栗と籍するものこれにて、後ち地名鳥羽田を姓とす。

畑彌兵衛 大字鳥羽田の人、元治甲子の役に殉じ、正五位を追贈せらる、

千貫櫻 大字小幡にあり、今枯れて古株を残すのみ、水戸義公の愛観した櫻で  
其歌あり、

春風も心して吹けちるもうしさかぬはつらし花の木の下

小川町

郡の南端にあり、霞浦に接して汽船便を有し、人口五千餘、常磐線高濱驛から  
一里、

参宮鐵道 石岡を基點とする参宮線は小川町迄餘程工事が進行して居るから、  
本年五月頃には開通しやうか。

霞浦汽船 銚子より來るもの午前五時頃寄泊し高濱に向ひ、歸航は正午十二時  
發して銚子に向ふ、

稽醫館址 文化元年小川町の醫士本間玄珠運漕廳の舊館を醫學研究所に充てん  
ことを請ふ、藩主文公之を嘉納し稽醫館の名を賜ふ、藏書多く遠近の醫士就て  
學ふもの多かつたが、安政五年小川郷校と改稱し、大に文武を兼修したるも、  
元治甲子の兵燹に罹り、今は小學校の敷地になつて居る。

香取照女 香取神宮大宮司大中臣氏の後裔香取良恭（小川運漕廳の手代）の女  
で、學問を好み、親孝行で、父死後法華經を書寫して菩提寺に納め、其冥福を  
祈る等孝行貞節の狀藩廳に達し、哀公より物を賜はり、郷人其傳を上梓して國  
内に公にした。

小川故城址 建久中下河邊政平の築く所、天正十六年佐竹氏の爲に陥る、

川根村

押邊松 大字押延小沼氏の有なり、一幹に十八種の松の種類を接木したもので高一丈、東西十間、南北八間あり、

西部方面

河和田村

水戸驛から、上り列車を赤塚驛に下車すると河和田村となる、  
報佛寺 大字河和田にあり、親鸞の弟子唯圓坊の開基で、親鸞の親筆を藏す、  
河和田城 嘉應年間江戸氏の居城であつたが、應永二十九年江戸氏水戸城を攻陥し、これに遷りたるも、天正十八年佐竹氏水戸城を奪取するや、河和田城従つて廢滅となる、城廓塹濠今尙存す、  
縣立薰風院 大字見川にあり、不良少年を收容し教育する所にて、研究施設見

るべきもの多い、院長根本陳平氏の苦心功勞は有名なものである。

上中妻村

妙德寺 赤塚驛から三十町、西へ上中妻村大字加倉井に至れば、常陸日蓮宗最初の道場たる妙德寺がある、日蓮聖人が文永二年常陸遊化の際法筵を設け説法したる靈跡であるので、建治二年日高上人及び波木井彌三郎（身延山大檀那の三男）の二人身延より來りて一寺を建立す、これ現今の隱井山高在院妙德寺である。

常陸湯 大字加倉井にあり、源義家奥賊征行の途、此處に來り、滾々と涌き出づる靈泉に沐浴して戰勝を祈り、且つ八幡社を祀る、これ隱井八幡にて、其神像今尙妙德寺に傳はる、後年日蓮此處に來りて隱井の靈泉を湧かし沐浴して説

法をなしたる所なりと、靈泉は其後妙徳寺奥の院の中心となりたるが、久しく  
湮滅に歸し居りたるを大正十一年波木井氏の後裔加倉井邦彦氏之を再興した。

中妻村

有賀神社 内原驛より二十町大字有賀にあり、天正二年九月廿五日大洗磯前神  
社へ神輿を渡御し、同社よりの献魚を持認りて祭事を行ふの慣例を造り、以後年  
々同日を以て之を行ひ今日に及ぶ、今は毎年十月二十五日に變更したるも、渡御  
途上小兒を負ひたる婦女の參詣するもの夥しく、就中水戸市最も雜鬧すといふ  
教育 内原驛より二十五町、妻根高等小學校は數ヶ村組合立の小學校で、明治  
二十六年以降名校長明間卯之介氏以下職員が研究努力の結果、農村教育の實績  
を擧ぐる所多く、校名大に天下に振ふに至つた、

和光院 大字田島にあり内原驛より三十町、昔江戸氏の菩提寺で血不動尊を以  
て有名な眞言宗の寺である。

大足城跡 大足大城山にあり、涅槃猶存し、往昔江戸氏の臣外岡伯耆守の居り  
し所と傳ふ。

下中妻村

御野立場 内原驛より十五町大字杉崎和尚塚にあり、堀割延長二十八間、巾二  
間、高九尺にして、こは明治三十三年十一月十六日、近衛小機動演習を親しく  
櫛はせられんが爲め、明治天皇の行幸あり、御野立遊ばされし所である、

北部方面

渡里村

水戸上市を西北に出つれば、渡里村となる、縣道の北に當つて一大廊内に數棟の建築は、

歩兵第二聯隊の營舎で、それに對して縣道の南にあるのが練兵場で、附近に射的場もある、水戸から一里弱金澤阪の上には一森長者の古蹟もあれど、坂を下れば飯富村となる、直ちに左に折れて坂を一つ上ると山根村だ、

山根村

日新塾址 大字成澤にあつて、天保の頃より安政にかけ約三十年間に亘り、文藝武術三千餘人の學徒を教養したる鴻儒加倉井砂山の學塾の跡である、明治九年火災に罹り、全部焼失したるも、今再建し又砂山文庫の再興中に屬す、齊藤監物、川崎八右工門、香川敬三等は皆此塾にて養成された人物である、

加倉井砂山墳墓 同大字西南方の丘陵にあつて、碑文は門弟齊藤監物の書きしもの、

飢饉土手 同字加倉井平左工門氏邸數千坪の周圍を烏帽子形に廻らしたる堤なり、天明年間大飢饉の際同家が庫を開いて附近の窮民を恤みしより、其恩を忘れざらんが爲め窮民等が築きしものといふ、

成澤礦泉 西方山岳地帯の中にあり、湯澤山と稱し、老樹多く、泉の水を沸かし病を治するを以て古來名高く、浴客常に集まれり、内原驛より一里餘、成澤を西北に向つて貫けは小松村となる、

小松村

小松寺 幕末の勤王僧松箱上人を出したる寺にて大字上入野の西極にあり、眞

言宗にて白雲山普明院と號し、平貞能の開基で、彫刻の精巧な觀音像があり、國寶中の珍品と稱さる、又義公筆和歌の寺寶もある、

平重盛墳墓 小松寺上の山腹にあり、今一大碑建ち、小松宮殿下の篆額を拜す、墓は平貞能が其遺骨を齋らして埋めた所である、

興野靴 大字増井の人、助九郎と稱し、春草と號す、加倉井砂山の塾長で、後ち弘道館の教師となり、元治甲子の役難に殉じ靖國神社に合祀せらる、

西郷村

藤井川發電所 大字下古内の地内藤井川の岸にあつて、今茨城電力株式會社に併合す、

清音寺 同字の山奥にあり、太古山と號し、禪宗にて佐竹氏の創建なり、其有

名なる山門の仁王像は現に倫敦博物館の珍なりと聞く、今や堂宇を再建して、

漸次舊時の壯觀に復しつゝありと、

鯉淵要人の墓 大字上古内鹿島神社の西側にあり、櫻田烈士の一人にて靖國神

社に合祀せらる、

青山神社 大字上青山にあり、五十猛命を祀る、延喜式社に列し、古史にも其

名見ゆ、

春園石 大字春園の山岳地帯より出つる灰褐色の石材で、耐火性に富む、

飯富村

水戸上市から堀村に出で、縣道を石塚に向ひ金澤坂を下れば、其處に展開するのが飯富村である、

飲富甘薯。は其東方那珂川の流域から産する有名なイモである、それよりは先  
つ有名なのが、

真佛寺。大字飯富の南端馬が峯にあり、宗祖親鸞が百日間滞敷した所で、真佛  
上人（大部兵太郎）の開基である、寺寶に親鸞の作つた左の田植歌の真筆及親  
鸞關東繪傳などがある、

田植歌

五劫思惟の苗代に

一念歸命のたねをおろし

念々相續の水を流し

このみとるこそうれしけれ

兆戴永劫のしろをして

自力難行の草をとり

往生の秋になりぬれば

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

真佛上人墓。真佛上人は即ち大部平太郎で、此土地の者なるが親鸞が稻田の草  
庵に行きて無二の信徒となる、其後文暦元年平太郎水戸城主佐竹季賢に従つて  
紀州熊野權現に詣づるや、靈夢に感じて途親鸞を訪ひ、遂に出家となり、歸り  
て真佛寺を開き、弘長元年逝く年六十三、墓は馬ヶ峯の最南端眺望よき所にある  
大井神社。廷喜式社に列す、應永中江戸氏の亂に神社兵燹に罹りしも、永正年  
間松本刑部之を再建す、貞享中源義公神鏡を鑄て本社に奉納した大字飯富中央  
の高臺に在る、

藤内神社。大字藤井にあり、經津主神を祭る、延喜式小社に列す、大永年間社  
殿神寶焼失したるも、元祿に至り源義公之を再建す、

十萬原。大字藤井の西北方にあり、源義家が十萬の兵を朝した所なるを以て、

十萬原と云ひ傳ふ、今は一部耕地となり、他は殖林地になつて居る。

石塚町

飯富村を越い、坂を上げれば石塚町大字那珂西となる、

寶幢院。眞言宗にて、大字那珂西にあり、那珂川其下を流れ眺望よし、白鳥流

二十八祖知堂上人の開基にて、當流第一の舊跡である、源義公の元服したる寺

にて、其遺髪今尙存し、義公筆の和歌もありと、

那珂西城址。大字那珂西にあり、那珂川其下を流れ、廓中三に分れ、今猶湮壘

あり、南朝の忠臣那珂迪辰之に居り、建武年中賊軍に抗したが、敗れて一族戦

死した、

薬師寺。大字石塚の南方にある、大伽藍にて佐久山と號す、妙成上人の開基な

るが近古天台宗となる、其薬師如来の大像及胎像並に日光月光の兩脇立尊は先年國寶となる、境内に三重塔ありしも明治三十年頃大破、今は朽滅せり、増子金八郎墓。大字石塚上町稻荷社の北方なる大島氏の墓中にあり、櫻田烈士にて、石塚に落延び、明治十五年病歿す、寺門静軒。大字石塚の人、夙に江戸に出て塾を開き又著述をなし『江戸繁昌記』あり、

煙草收納所。水戸專賣支局石塚出張所は大字石塚にあり、此地方數ヶ村の農民が栽培する煙草を收納する所である、

坪村

峨嵋先生墓。大字上坪の村社境内にあり、立原翠軒の碑文を刻す、峨嵋は笠間



藩士にて本名生駒周藏、碩學にして天下を周遊し、後ち坏に塾を開き大に子弟を教養し、文化元年歿す、

栗野塗。大字粟にて産出する漆器なるが、重に膳、盆の類にて、製法は四百餘年前の發明に係るといふ、彼の能代塗は此の栗野塗から出てしものにて其れは昔佐竹氏が水戸より秋田へ移封せられた際持行かれたに起因す、

岩船村

坏村から西方の臺地へ上れば、そこは岩船村となる、

悪路王の首。大字高久の鎮守社内にある。坂上田村磨東征の折、奥賊の巨魁悪路王の首級を獲て朝廷に献せんと此處迄持來りしに、腐敗したれば鎮守社に納めたるを、村人これを木乃伊に製して同社の寶物とす、後ち源義公これを城中

に收めて、其模造を同社に納めたといふもの現存す、

黒澤時子墓。大字錫高野にあり、同地黒澤莊二郎の女で、和漢の學に通じ忠孝

の志厚く、水戸烈公の幕禮を被り、幽閉せらるるや、憂愁措かず、遂に意を決して江戸に出て又京都に上り其冤を訴へんとして捕へられ獄に投せられたが、

後許されて家に還り明治廿三年歿す、歳八十五、明治四十年從五位を追贈せらる

北方古墳。大字北方にあり、小學校裏の丘陵の崖腹に露出し、大石數枚を以て疊む、

高取鍍山。大字錫高野にあり、佐竹氏時代に金銀錫を産せしが、明治の末年頃より重石を採掘するに至り、三菱鍍業に屬して、世界戦亂當時は盛に生産したりしも、今は停止中なりと、

岩船石。大字岩船の山中より出つる石材にて色稍青く石質堅牢に、古來よく建築に用ゐらる、

大山寺。大字高根にあり、眞言宗にて、寺内に乾達婆王尊あり、五百年前大山困幡守信仰せし以來殊に小兒蟲切に靈驗高しとて遠近より參詣するものが多い石船神社。大鳥船神にて大字岩船にあり、延喜式小社の一なり、今村社となる、古史に『貞觀元年四月二十六日常陸國正六位上石船神授從五位下』とあるは此社にて祠傍に苔むせる石造の一大古船がある、

## 澤山村

坪村の縣道を北に向つて過ぐれば、澤山村となる、此處は茶と蠶業の盛んな村である。

大山城址。大字阿波山西方平地に高く突起せる城址で往古大山氏の居城といふ阿波上山神社。少彥名命を祀る、延喜小社の一にて勸請は文武天皇の大寶元年十月なり、仁和二年十二月從五位上を授けらる、今郷社である、

大根干瓢。大根を干瓢の如く製したものを産す、或は酸浸しとし、種々簡易料理に利用多く、これは大字上阿野澤の篤農家所寅之介氏の工夫發明に係り、從つて同大字に産するもの良品だといふ、

鮎。此村那珂川の急流に沿ふを以て、秋季鮎を漁するもの多く、其群をなして淺瀬を上下するところを、多數のカラ勾針にて釣る所謂『鮎引ツかけ』といふ漁法を用いてゐる、

白山。大字赤澤にありて、海拔五百六十尺山上に白山神社あり、春期登山者多し

龍谷院。大字下阿野澤の山腹にあり、曹洞宗にて、瑞雲山と號す、長祿三年秀峰宗岱大尚和の創建なり、開山の際井を掘りて龍骨を得、今寺寶として保存すと赤澤富士。眉山ともいふ大字赤澤にあり、海拔七百二十尺、御前山。村の北端那珂川の崖頭に位し、全山鬱蒼して茂り老松古杉枝を交へ、絶壁下を那珂川流れて景色頗るよし、今は山腹を切り開き、伊勢畑村への交通便利となる、

伊勢畑村

郡の最北の小村にて煙草を産し、山には松茸を生ず、西は朽木縣に境す、相川温泉。上下伊勢畑の境なる山中の溪谷間にあり、病浴によく且つ幽邃脱俗小天地で、僧空海曾遊の地だと、

香川敬三。大字下伊勢畑の人、初め鯉沼庵と稱し夙に勤王の志を懐き、幕末の志士として東奔西走、大に王事に力め、戊辰の役官軍の參謀として殊勳あり、後ち皇后宮太夫となり、伯爵を授けられ従一位勳一等を賜はり今は故人となつた蓮田東藏。大字下伊勢畑の人、香川伯の實兄にて、安政四年米國使節の横暴を憤り、江戸に上りて之を刺さうとしたが捕へられ、獄中に死す、年二十二、文久三年其罪を赦され、明治四十四年特旨を以て従五位を追贈せられた、連山和尚。大字上伊勢畑字沼の上の人、寛永十一年の生れで、下阿野澤龍谷院に入り僧となり、後日立大雄院の住職となり、又水戸祇園寺にも居たといふ、義公と往復したる名僧であるが、晩年下野國富山村大中禪寺に寂す、元祿年間に建てた碑が其境内にあると、

井。殿。山。大字下伊勢畑にあり、海拔五百七十尺、  
 香。川。伯。遺。髮。碑。大字下伊勢畑にあり、慶應三年鷲尾待從等と勤王の義兵を高野  
 山に擧ぐるや自ら長髪を切つて『黒髪のかかる亂れの世にしあれば死しての後  
 の片身とも見よ』といふ一首の和歌と遺髪とを同郷の人富田某（岩船村の人）  
 に托して郷地に送つたが、富田は憚りて之れを家の棟木に隠匿し置きしを、四  
 十年の後ちこれを發見し、伊勢畑鎮守の附近に埋め、碑を建てたものである、

## 西茨城郡

沿 革

古へ那珂郡に屬して居たが、後ち茨城郡となり、明治十一年郡區の編制に會し  
 て、其西部を割き西茨城郡となつた、

地 勢

三角形をなし、西北は山脈多く、栃木縣芳賀郡と境を交へ、東境に屹立するの  
 が朝房山、海拔七百八尺、北の高嶺は金山峠、佛頂山などで、南に高いのは板  
 敷山、難臺山、愛宕山などである、面積二十三方里五〇一、宅地耕地反別六百

九十二町步餘、町數三、十一ヶ村あり、戸數一萬二千六百餘、人口六萬八千二百餘なり、

首腦地

郡内で最も繁盛の市街をなすものは小山線に沿ふ笠間町である、笠間は舊牧野氏（八萬石）の城下で、現に郡役所、警察署、縣立農學校等の官衙あり、近年稻荷神社を以て更に一層の名町になつて居る、

教育

郡教育會事務所は郡役所内にあり、其部會を左の如く分けてある、

東南部會（宍戸尋常高等小學校） 中央部會（笠間尋常高等小學校）

西部會（西那珂尋常高等小學校）

學齡兒童就學歩合は九八、六一にて、青年會員二千二百餘、處女會員一千百餘人あり、尙郡内には縣立笠間農學校あり、私立笠間女藝學校もあり、小學校總數二十四校、實業補習學校二十四校、

交通

水戸よりの茂木街道が其北部を東西に貫通するの外、石塚町より笠間に到るの縣道あり、笠間よりの茂木街道もあれど、小山線東西に本郡を貫いて、東より友部、宍戸、笠間、稻田、福原、羽黒、岩瀬の各停車場がある、友部より常磐線の岐るゝあり、岩瀬からは筑波鐵道も連絡するので、本郡の交通は山岳多き割合には便利を極めて居る、

物産

米雜穀及び特産では繭、桑苗、薪炭、石材、陶器などである、殊に福原、岩瀬、  
稻田から出る花剛石は近時著しく需要を増し、笠間焼も一種素朴の特長を以て  
販路次第に擴張されて来た、

主 要 名 地

西念寺。西山内村大字稻田にあり、親鸞上人の靈跡として名高く、稻田驛から  
八町、  
稻田神社。西山内村大字稻田にあり、稻田驛より西方六町、延喜式内の大社で  
縣社に列す、  
胡桃下稻荷神社。笠間町の中央にあり、停車場から約十三町、軌道人車の便が  
ある、

富谷観音。北那珂村大字富谷の山腹にあり、保護建造物で岩瀬驛から約十八町  
友部種羊場。友部驛を去る南へ十町、平坦な一本道を進めば農商務省直轄の友  
部種羊場がある、  
櫻川。羽黒驛から十町、古來櫻の名所なるが、今も磯部の櫻として名高い、

案 内 順 序

先づ常磐線岩間驛附近から始まり、次で友部驛、宍戸驛を起點として其附近に  
及び、笠間に入り、順次小山線を傳ふて西に至り、終りに北部各村に及んで此  
郡を一巡した、

【常磐線岩間驛】 岩 間 町

岩間町は、村であつたのを昨年町制を施行した地であるが、繭、薪炭や石材の

産出集散が近時盛んになつた結果である、

愛宕山。大字泉にあり、海拔一千五十六尺、頂上の愛宕神社は火伏せの神として登山参詣する者多く、又霞浦を眺むべく、風景もよろしい、

玉簾塚。大字岩間下郷字上管谷の山中林にあり、高一尺、周圍四間、往年六戸家政の長子家周鎌倉に赴かんとして愛馬「玉簾」此に斃る、土人之れを爰に埋めて玉簾塚といふと、

難臺山城址。大字岩間上郷字館岸山にあり、東西百間、南北四十間、東は山岳に連り、西は難臺山の絶壁で、四方繞らすに空渥を以てす、これ往昔馬左中将安國の居城で、建武中興の時小田氏の族岩間胤知之に居り、元弘四年七月小田孝朝の子五郎等小山若犬丸と共に此に據つたが、八月敵將上杉禪助攻來り城

遂に陥ると、山頂は海拔千九百二十尺あり、

友部驛

友部は常磐線から、小山線の分岐する所で、其停車場は可なり混雜する、驛に接續して櫻樹多く、花時夜櫻見物の人雲集し、近年夜櫻の名所となつた、

友部種羊場。友部驛から南へ十町の所にあり、農商務省直轄に屬し、大正七年の設立である、種緬羊を輸入飼養し、仔羊拂下、種羊貸付等の事業を行ひ、現在の飼育頭数は千二百餘頭である、種類は十餘種、年々四五百頭を生産し、民間へ拂下けて居る、三百餘町歩の農場をアメリカ式の大農式に經營し、トラクタ一の爆音凄ましく活動して居る、

大原村

小原城址。友部驛から東北へ數町、大原村大字小原字館にあり、地勢平坦乍ら  
湍壘の跡は猶ほ存する、傳ふる所では永享元年里見家基久慈郡依上城を抜き、  
功を以て封を加へられ、弟滿致を此に置くこと、

六 戸 町

六戸町六戸は、古へ新治郡であつたが、文祿年間茨城郡に屬した、舊松平氏の  
城下で、元治甲子の役藩主松平大炊頭に依つて六戸の名大に世に現はるゝに至  
つたのである、

殉難碑。大字太田養福寺境内にあり、元治甲子の役、六戸藩主松平頼徳以下藩

臣殉難者の碑で、驛より六町の所にある（明治五年建碑）

北山不動。大字太田より北に向ひ半里池邊を迂回して石段を上げば不動尊あり

老樹多く、瀑水響き、絶好の仙境、驛から二十二町

六戸四郎知家墓。大字平町の西方臺地にあり、往古八田知家此地を領し、建保

六年三月三日卒す法名諦法院殿尊念善光大居士、驛より八町、

六戸城址。大字平町字新城にあり、面積四町五段、正保年中秋田俊季私かに之  
を築き、幕譴を被り破壊さる、

松平頼徳。六戸藩主大炊頭であつたが、元治甲子水戸正好二黨の軋轢甚だしい  
ので、水戸藩主順公代理鎮撫使として、水戸へ下向した所、途中より筑波の義  
兵（當時は暴徒と稱さる）が追従し來た爲め、城兵（當時奸黨と稱さる）は之  
を拒んで入れず、遂に戦端を開くに至つたが、幕府が大兵を發して城兵を援け  
たので、軍敗れ頼徳は自盡した、後ち從三位を追贈せらる、



笠間町

一三四

笠間町は笠間驛から十三町軌道人車で市街まで行かれる、舊八萬石牧野氏の城下で、郡の中央に位し、戸數千八百、人口約一萬、近年胡桃下稻荷神社の參詣人夥しくなり、漸次繁盛の町になつて來た、

産物 陶器、瓦、洋傘柄、製材等である。

笠間城址 町の東部佐白山上にあり、驛より三十町（元久元年從五位下藤原時朝の築いたもので、其後數代を経て、寛永十八年淺野内匠頭長綱之を領し、延享四年牧野備前守貞通、日向國延岡から此に徙り領し、以後明治四年まで牧野氏の領であつたが、今は殘壘のみとなつた、蓋し城郭樓櫓を毀ち其材を以て山上に佐志野神社を營んだによる、

御駐蹕遺跡 高等小學校に其二階建一棟存す、明治三十三年十一月十五日近衛師團機動演習の爲め、明治天皇の車駕笠間町に臨幸し、此を行在所にし給ふた

大石良雄宅址 字田町にあり、淺野氏笠間を領せし際、大石良雄の祖父良欽ま

で居住せし所と傳ふ、

大黒岩 佐白山の中腹にあり、笠間城追手門の通路左側にあり、花崗石なるが、高二間徑二間、形大黒天に似て居る、

隣民詞碑 笠間公園（佐白山中腹）内にあり、藩主牧野牧喜の俳句を刻す、

『ふりむくは泣く兒の親か田植笠』

書は六世の孫貞直の筆で、碑文は故子爵牧野貞寧の撰である、佐白山を中心にして其他名所頗る多い、

一三五

加藤櫻老 幕末の有名の鴻儒で櫻川記念碑を選文す、

稻荷神社 胡桃下稻荷、又紋三郎稻荷ともいふ、社前の花崗石大鳥居は關東一の稱がある、近年參詣人最も夥しく、笠間の稻荷か、稻荷の笠間かを疑はしむる程である、關東北に於ては實に成田に次ぐの大盛り場として海内に響いて来た、社の後園の美觀、及び社殿の彫刻等見るべきもの少くない、大祭は年越しと初午である。

佐志能神社 佐白山上にあり、舊城天主閣の趾である、延喜式内社に列する有名の社で、現在の社殿は藩主牧野貞寧子が、笠間城の建物を毀ち其餘材を以て造營せられたものである、

畫家 笠間藩の家老木村信義翁の長男なる木村武山氏は日本美術院の鑑査員で

畫名一世に高く、江川武村氏も此地出身で曾て帝展に入選せり、

南山内村

岩谷寺 大字來栖にあり、醫王山と號す、眞言宗の古寺で、笠間驛から西南二十三里ばかりの所にある、平城天皇の勅願寺で大同四年空海の弟子秀悅阿闍梨の開基に係り、本尊藥師は空海の作といはれ、前立の醫王如來、不動毘沙門、十二神將は運慶の作と傳ふ、今いづれも國寶に指定さる、古は美しい大殿堂を有したが、文政十一年、及明治十六年との兩度の火災に罹り、國寶以外一物も留めず烏有に歸し、唯だ現寺は近年の再建で、他に見るべきものはない、

北山内村

佛頂山楞嚴寺 大字片庭にあり、本尊は大日如來で、花園院と號す、仁明天皇

の嘉祥年間、千巖といふもの、開基に係り、後ち元久年間藤原時朝笠間城を築きし際、新に佛頂山麓に地を相し、寺院を移し、僧大拙を以て再建開山となす、且つ寺領百三十五石を給したが、永和年間大功德和尚の時、佛頂山（海拔一千四百三十四尺）の半腹を開き、大日如來の像を安置すべき殿堂を建立す、堂は七間四面なり、然るに寛永八年の失火に全部烏有に歸し、僅に山上の殿堂のみ残り、古文書、寶物皆散逸して唯だ定家郷真筆の式紙和歌一首あるのみ、又山門丈けは特別保護建造物になつて居る、

瀧野不動 大字箱田字瀧の和田にあり、本尊不動明王は丈け一丈餘、自然石を以て彫る、境内は頗る風景に富む、

片庭の蟬 大字片庭七不思議の一つに奇蟬がある、往昔は楞嚴寺境内の大杉に

鳴いて居たのを、大杉枯れて後は大内八幡宮の大椎（二本あり）に移つて年々鳴く、形極めて小さく虻位で、しかも其鳴聲は猛烈に大きいので名高い、群居する様だが何人も樹にあるを見たことがないといふ、年々土用の前十日頃、午前二回、午後二回と鳴く、一蟬が音頭を取れば全蟬皆鳴き、十五六分間繼續するが、土用に入ると鳴かなくなる、そして他の樹へは決して移らない、毎年同一樹木に棲んで居ると、

笠間氏墳墓 大字片庭楞嚴寺境内にあり、時朝以下歷世のものにて十七基並ぶ

#### 西山内村

稻田停車場 大字稻田にあり、笠間の西隣驛で、花崗石材の運送盛んである、

稻田神社 大字稻田にあつて驛より西方六町の所にあり、延喜式内の大社で、祭

神は奇稻田姫命、上古新治國造が出雲國から分祀したもので有名な縣社である、  
 西念寺。元久年間稻田九郎頼重、笠間左衛門時朝等、親鸞上人を越後より稻田  
 に請じ、頼重は其弟子となり、頼重房教養と名づく、かくて吹雪谷の勝地に草  
 庵を結び、元仁元年始めて真宗を此の地に開闢した、これ今の西念寺の創始で  
 ある、大字稻田にあつて、停車場より約八町、寺寶として重大なものは『御筆  
 止の名號』で、こは親鸞が五十二歳の時此處に真宗の聖典全部を選纂したり、  
 満足せりとして紺紙金泥の六字名號を揮毫したものである、『御満足御眞影』は矢  
 張り其時佛師に命じ壽像を彫刻せしめたもの、御骨堂は親鸞の分骨を埋めた所  
 見返橋は親鸞が歸西の首途を惜しみし記念橋で、寺の西方田圃道にあり、西念  
 寺は真宗隨一の發祥地として、遠近の信徒參拜するもの引きも切らずである、

玉日廟所。大字稻田にあり、四層の方石で高六尺ばかり、驛より三町、親鸞上  
 人正室玉日姫の墳墓である、玉日姫は關白九條兼實の女で弘長三年九月十三日  
 歿す、年七十八、

花崗石。稻田驛を去る三町餘の山腹より産す、年産額四七七〇切（一切は一立  
 方尺）此價額六七一四〇〇圓、採掘従事人員一千人を越え、近年上海方面へも  
 輸出するやうになつた、

我國山。大字本戸より登るべく海拔一千八百四十尺あり

北那珂村

五大力塔。大字池龜にあり、天慶三年將門征討の時、日乘上人藤原秀郷の請に  
 より、檜を以て五個の靈像を彫刻し、堂宇を建て、之を安置し、大壇を築いて